

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(2)

守川知子* 監訳

ペルシア語百科全書研究会** 訳注

(p.21) 第1部 高き諸天とそこに属するものの驚異について

[天と地の創造について]

至高なるアッラーのいわく、「天と地の創造に就いて考える者は言う(ではないか)。『主よ、あなたは徒らに、これを御創りになったのではないのです』」[Q3: 191]、[すなわちペルシア語では、神は]「創造について考えよ。もろもろの天はこれほど優美に、またもろもろの大地はこれほど不浄に、おのずと生じたのではない」とおっしゃっている。さらに[神は]創造において自らを讃え、「かれの栄光を讃える。かれは凡て雌雄に創られた方である」[Q36: 36]と言われ、「かれはあなたがたの知らない、(外の)色々な物を創られた」[Q16: 8]とおっしゃった。そして動物を類別され、「またアッラーは、ありとあらゆる動物を水から創られた。そのあるものは、腹で這い、またあるものは2本足で歩き、あるものは4つ足で歩く。アッラーは御望みのものを創られる」[Q24: 45]と言われ、動物以外のものを、「暗黒と光明を定めし者」¹⁾というお言葉にあるように、2種に類別された。これ以上[の分類]はない。

さて、被造物は4つの種類に分かたれる。動物、植物、無生物、そして諸天や星、水、火、空気といった、動物でも植物でも無生物でもないものである。あらゆる被造物は、そのあるものは靈魂(arwāh)であり、それはきわめて優美で、天界(‘ālam-i ‘ulwī)にある。またあるものは不浄な肉体(ajsād)であり、それは[地上たる]下界(‘ālam-i suflī)にある。さて私は、天界から述べていこう。

<玉座について>

(p.22) 知れ。至高至大の創造主は『クルアーン』の中で「玉座(‘ars)」について言及しているが、その名を述べる所では必ず、それを「偉大なもの(‘aẓīm)」と呼んでいる。あのお方が「偉大なもの」と呼んでいるものを描写することは誰にもできない。ただし伝承の中に見られるものは別であるが。よって、以下のことを知れば十分であろう。すなわち、すべての存在は、天界であれ下界であれ、玉座の内側にある。それはまるで円の中にあるコンパスの点のようなものであり、玉座が世界のあらゆる部分をとり囲んでいるのである。

アブドゥッラー・ブン・アッバース(‘Abd Allāh b. ‘Abbās)²⁾とアブドゥッラー・ブン・サラーム(‘Abd Allāh b. Salām)³⁾から伝えられているところでは、次のように言われている。創造主が生ぜしめた最初のものは、1粒の白い珠(durr)であった。7000年の後、[創造主が]厳然たる目で

* 北海道大学大学院文学研究科准教授

** 本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号の監訳者による解題を参照のこと。

1) 「天と地を創造し、暗黒と光明を定められる」[Q6: 1]を下敷きにした表現。

2) イスラーム最初期の学識者(686年頃没)。多くの伝承を集め、『クルアーン』のテキスト作成の際に大きな役割を果たしたとされる[EF: ‘Abd Allāh b. al-‘Abbās]。

3) マディーナ在住のユダヤ教徒で、最初期の改宗者(663/4年没)。改宗に際して、預言者ムハンマドから「アブドゥッラー(神のしもべ)」の名を授けられた[EF: ‘Abd Allāh b. Salām]。

それを見つめると、[珠は半分]に割れた。半分は流れる水となり、もう半分は、そこから玉座をお創りになされた。そして「玉座が水の上にあった時」[Q11: 7]という至高なるお方のお言葉にあるように、数千年の間、この玉座は水の上にあった。

その後、創造主は、人間、ライオン、ハゲタカ、牛の姿をした4人の天使を創造された。彼らは[玉座を]持ち、7000年間で膝のところまで持ち上げた。至高なるアッラーに力を請い、さらにそれを肩まで持ち上げた。そのとき彼らは自分たちに対して言った。「われわれは、最も偉大な被造物を持ち上げたのだ」と。[しかし]創造主は玉座を吊り上げられたので、彼らには何も残らなかった。「かれは至高の位階におられ玉座の主であられる」[Q40: 15]という至高なるお方のお言葉にあるように。

また玉座の担い手は、「その日、8人(の天使)が、あなたの主の玉座を担うであろう」[Q69: 17]という至高なるお方のお言葉のとおり、8人である。

学識者らは言う。「玉座は光り輝く偉大な『物質(jawhar)』であり、『八方から玉座を囲んで』[Q39: 75]というお言葉にあるように、霊的な天使たちがその周囲をまわって(p.23)いる。彼らは玉座を見つめ、あらゆる存在物を玉座の浄らかさの中に見ている。そして、従順な者の姿を目にすると、その者には祝福を与え、罪ある者を見ると、その者の赦しを請う」と。

この玉座には多くの基柱があるが、台座(kursī)はその基柱の中心に置かれ、海に浮かぶ椀状のものとして示される。

<問答>

もし、「創造主は玉座を必要としていないのに、なぜお創りになったのか」と問われたら、私は次のように答えよう。

あのお方が創造されたものはいずれも、必要であるがためにお創りになったのではない。創造主は大地を必要としていなかったが、お創りになった。また、諸天を必要としていなかったが、お創りになった。同様に、創造主はすべての数を知り、さまざまな重さや単位をご存じであるが、天秤を設けられた。「われは審判の日のために、公正な秤を設ける」[Q21: 47]という至高なるお方のお言葉にあるように。つまり、お創りになったのは証し(hujjat)のためであり、必要(hājat)のためではない。

『クルアーン』や使徒の伝承による玉座の説明は、ここではこの程度で十分であろう。そうでなくとも、どんな賢人も心に思い浮かべることができないものについて、話すべきことはない。

<問答>

もし、「あのお方は決してお忘れにならないのに、書板(lawḥ)と筆(qalam)を創造されたのはいかなる英知によるのか」と問われたら、カアブ・アル＝アフバル(Ka'b al-Aḥbār)⁴⁾が次のように伝えていると答えよう。

「筆には[寿命が]1万2000年あり、書板には筆の2倍[の寿命が]ある。創造主は筆に、『われのほかには神はなし。われの定め]に満足せぬ者、われの恩寵を感謝せぬ者、われの試練に耐えぬ者、そのような者たちはわれと同様の主を求めてみるがよい』と書板に書くように命じた」と。[すな

4) イエメン出身のユダヤ教徒で、イスラーム最初期の改宗者(652/3年没)。聖書や南アラビアの伝統に詳しく、第2代正統カリフ、ウマル・ブン・アル＝ハッターブに関連する多くの伝承を伝える[EF: Ka'b al-Aḥbār]。

わち筆は] 1万2000年かけて、これだけのことを書いたのである。

<問答>

「なぜこの程度のことを1万2000年もかけて書いたのか」と問われたら、次のように答えよう。

筆には、書いたところで何の報いもなく、長い時間がかかるとしてもかまわない [からである]。だがアダムの子孫は (p.24) 1昼夜で2万4000回の呼吸をし、1呼吸ごとに「アッラーのほかには神はなし」と1度唱える。そうして多く唱えれば唱えるほど、報いも多くなる。

知れ。創造主は、何を創造するか、また被造物が初めから終わりまでどうなるのか、[過去も未来も] すべてご存じである。[そこで] 書板に記し、書板をイスラーフィール (Isrāfīl)⁵⁾ に委ねた。それには、世界の初めから、何滴の雨が降り、それによってどれだけの草が生えるか、それぞれの木には何枚の葉があるかといったことが、この世界の終わりまで書かれている。イスラーフィールは [それを] 見て、創造されたものと書板とを照らし合わせるが、[そこには] 1滴の過不足も見られない。

<イスラーフィール——彼に平安あれ——について>

ハディースに次のようにある。アダムに最初に跪拝した天使はイスラーフィールであり、彼は讃えられた。創造主は「護持された書板 (lawḥ al-mahfūz)」を彼の額の前にぶらさげた。彼はそれを見守り、玉座の下に立ち、「ラッパ (ṣūr)」を [腰の] うしろにつけている。「ラッパ」は角笛に似ており、幸運な者の魂も、哀れな者の魂も、[肉体が死ぬと] その中に入る。そして復活の日に [イスラーフィールがラッパを] 吹くと、魂はそこから飛び出し、それぞれ自分の肉体に戻っていく。

スンナの徒 (ahl-i sunna) が、『クルアーン』と伝承から述べているのはこのくらいである。我々が [目で] 見ることのできないものについて説明するのは難しい。

イスラーフィールは「ラッパの持ち主 (ṣāhib al-ṣūr)」、**「死者への触れ役 (munādī al-amwāt)」**と呼ばれる。なぜなら、復活の日には [彼が] 死者に呼びかけ、「おお、腐敗した者たちよ、起き上がれ。みな者、起き上がれ」と言うからである。いくつかの書物では、「創造主のしもべ (‘abd al-Ḥāliq)」とも呼ばれ、諸天では「ふいごの父 (abū al-manāfiḥ)」と呼ばれる。**彼に平安あれ。これが彼の姿である**⁶⁾。

知れ。自らを賢人のうちに数え上げようとする人々は、こういったことをまったく (p.25) 受け入れようとせず、理性でもって推し量り、次のように言う。「[世界の] 初めの人々と最後の人々の魂が、どうやって1つのラッパの中に収まると言うのか」と。

彼らは復活を信じておらず、このような [発言] は戯言の一種でしかない。だが私は、『莊嚴なるクルアーン』が語っていることや、使徒や預言者たち——**彼らに平安あれ**——が語っていることは、すべて信じている。アッラーは正しいことを最もよく知りたまい、抛り、帰すべきお方である。

5) イスラームの4大天使の1人。名称はヘブライ語のセラピムに由来する。

6) 本書『被造物の驚異』は万物の姿かたちをあらわした膨大な挿絵で知られるが、すべての写本に挿絵があるわけではなく、また校訂本においてもすべての絵が載せられているわけではない。以下の項目でも頻繁に「これが○○の図(絵)である」という表現が現れるが、本訳注においては、これを反映させることはできず、すべて割愛する。

<ジブリール——彼に平安あれ——について>

ジブリール (Jibrīl)⁷⁾ は誠実な天使である。彼は「預言者たちの友 (walī al-anbiyā)」と呼ばれるが、それは、彼が預言者たちに啓示をもたらし、彼らの敵を制圧するからである。また「聖なる霊 (rūh al-quḍs)」とも呼ばれる。彼の芳香が届くところはどこでも、命や生命力が与えられる [からである]。彼の居所は、「(誰も越せない) 涯にある、シドラ木の傍で」[Q53: 14] という至高なるお方のお言葉にあるとおり、「最果てのシドラ (sidra al-muntahā)」である⁸⁾。シドラとは、創造主以外、誰もその大きさを知らない1本の木のことである。我らの預言者——彼に平安あれ——はおっしゃった。「私はこの木を見た。葉の1枚1枚が世界を覆うほどであった。天国の宮殿にはいづれも、シドラの枝が1本ずつ伸びている。」

ユースフ (Yūsuf) ——彼に平安あれ——が井戸に投げ込まれたとき⁹⁾、ジブリールはシドラの上にあった。至高なる神はジブリールに言った。「わがしもべ、ユースフを掴まえよ。」

ユースフがまだ井戸の底まで落ちきらないうちに、ジブリールは、シドラから30万年の道のりを飛来して彼を掴まえた。

創造主は彼にこのような力を与え、彼について次のようにおっしゃっている。「(かれは) 玉座の主の御前で (尊厳される地位の) 確固たる¹⁰⁾ 座につく、力のある (使徒である)」[Q81: 20]。

彼は翼の一方を東に、もう一方を西に広げている。

創造主はルート (Lūt) の民にお怒りになったとき、ジブリールを遣わした。[ジブリールは] ルートの民の7つの町を大地から根こそぎ、雄鶏の鳴き声や犬たちの吠え声が天使たちに聞こえる [ほど近い] ところまで [町を] 天空につり上げ、そしてそれら [の町] をひっくり返し、さらに (p. 26) 彼らの頭上に石を降らせた¹¹⁾。

ジブリールの偉大さについては、このようなことが言われている。

[ミーカーイールについて]

ミーカーイール (Mikā'il)¹²⁾ は [神の] 側近くにいる祝福された天使であり、慈悲なしには [地上に] 降りない。彼は「日々の糧の分配者 (qāsim al-arzāq)」と呼ばれる。しもべたちの糧食の監督者だからである。また「分け前を量る者 (wazzān al-qisma)」とも呼ばれる。海の水や雨の滴を彼が量るからである。諸天では「戦利品の父 (abū al-ḡanā'im)」、¹³⁾ 「糧を与える主のしもべ (‘abd al-Razzāq)」と呼ばれ、地上では「多くの手を持つ者 (dū al-ayādī)」、¹⁴⁾ 「ミーカーイール」と呼ばれる。

知れ。ユダヤ教徒たちが我らの預言者に尋ねた¹³⁾。「おまえの守護者 (ṣāhib) は天使たちのうち

7) イスラームの4大天使の1人。ユダヤ教、キリスト教のガブリエルに相当。

8) ジブリールとシドラの関係については、主に、『クルアーン』第53章5-18節を参照のこと。ムハンマドはミッラージュにおいて、ジブリールに導かれて7つの天を通過し、さらにその上の天のシドラの木のところに立ち、神と弓2つの距離に近づいたとされる [プハーリー著、牧野信也訳『ハディース』中央公論社、1993-94年、中巻、144-146頁、下巻、391-392頁ほか]。

9) 『クルアーン』第12章10-19節参照。

10) 『クルアーン』の原文には「確固たる (al-maṭīn)」の語はない。

11) ルートの民 (ソドムとゴモラの町の民) に対する神の懲罰の話は、『クルアーン』に何度も現れる。たとえば、第11章70-83節などを参照。

12) イスラームの4大天使の1人。ユダヤ教、キリスト教のミカエルに相当。

13) ユダヤ教徒の伝承の中には、ジブリールとの敵対にかかわるような要素は見られないが、ミーカーイールを自分

の誰か？」

〔預言者は〕言った。「ジブリールだ。」

彼らは言った。「もしおまえの守護者がミーカーイールだったなら、我々はおまえに信を置いたのに。なぜならジブリールはずっと我々の敵であったが、ミーカーイールからはどんな酷い目にも遭わされなかったからだ。」

創造主は次のような章句を下された。「言ってみよう（ムハンマドよ）。ジブリールに敵対するのは、誰であるのか。本当にかれこそは（主の啓示を）下す者である」[Q2: 97]。つまり〔ペルシア語での〕その意味は、「おまえたちはなぜジブリールに敵対するのか。ジブリールが行ったことはすべて、われの命によるものであり、ミーカーイールが行ったこともまた、すべてわれの命によるのである。」

<イズリヤーイール——彼に平安あれ——について>

さて、死の天使は偉大な天使である¹⁴⁾。彼は神の命令によって生命を奪う。「言ってみよう。『あなたがたを受け持つ死の天使があなたがたを死なせる』」[Q32: 11] という至高なるお方のお言葉にあるように。彼は「喜びを毀つ者 (hādīm al-laddāt)」、「家屋や宮殿を破壊する者 (muḥarrīb al-dūr wa'l-quṣūr)」と呼ばれる。彼の名は「イズリヤーイール ('Izriyā'īl)」であり、尊称 (kunya) は「永遠の父 (abū al-baqā)」、「アブー・ヤフヤー (abū yahyā)」、「征服者たる主のしもべ ('abd al-Qahhār)」、「墓に住まう者 ('āmīr al-qubūr)」、「死の天使 (malak al-mawt)」である。彼はいかなる王にも慈悲をかけず、いかなる子供であろうと容赦しない。彼が〔ひとたび〕赴けば、命を奪わずには戻りはしない。

<逸話>

次のように言われている¹⁵⁾。スライマーン——彼に平安あれ——のもとには、毎日、死の天使がやってきて、午前中いっぱい彼の頭上に立ち、それから帰っていった。スライマーンには1人の友人がいた。ある日、死の天使が彼を見つめた。その男は怯えてスライマーンに言った。「私は (p. 27) あの天使が怖い。私を風に乗せて、ファールス (Fārs) の地からヒンドウスターン (Hindustān) の地まで運んでくれ。」

スライマーンは風に命じて、彼を持ち上げ、ヒンドウスターンの地まで運ばせた。〔風は〕男を1本の木の根元に降ろした。

翌日、死の天使がスライマーンのところへやってきた。スライマーンは言った。「おお、天使よ。私には1人の友がいたが、あなたに怯えた。私に頼んだので、私は彼を風に乗せてヒンドウスターンの地まで運ばせた。なぜ私の友人たちを怯えさせるのか？」

〔天使は〕言った。「おお、アッラーの使徒よ。昨日、至高なる神は、ヒンドウスターンの地の何がしかの木の根元にいる彼の命を奪うよう、私に命じられた。だが私が彼を見たのは、あなたのもとであり、イスタフル (Iṣṭāḥr)¹⁶⁾ の領地でのことであった。私は彼を見つめ、〔彼が〕ヒンドウス

たちの守護者と考えていたことは、『ダニエル書』などの記述から知れるという [EF: Mīkāl]。一方イスラーム側の資料では、ジブリールがユダヤ教徒の敵であったことは、ハディースなどに見られる [プハーリー『ハディース』(牧野訳、中巻、144頁)。

14) イスラームの4大天使の1人。名称は「イズラーイール ('Izrā'īl)」の形が一般的。

15) ほま同様の逸話がガザリー著『諸王への助言 (Naṣīhat al-mulūk)』に見られる [Abū Ḥāmid Muḥammad Ḡazālī, Naṣīhat al-mulūk, Ed. J. Humā'ī, Mu'assasa-yi Naṣr-i Humā, Tehran, 1367s, pp.73-74]。

16) ファールスの一都市。アケメネス朝時代の遺跡であるタフテ・ジャムシード (パルセポリス) を擁し、イスラ

ターンに行くには長い時間がかかるだろうと独り言った。今日、かの地の木の根元に彼が座っているのを見たので、今しがた彼の命を奪ったところだ。」

[この逸話の] 意図するところはすなわち、[死の天使は] 偉大な天使であり、すべての者に生命との別れを味わわせ、すべての者から生命を奪う、ということである。創造主は彼に、大地に生きる者も天に暮らす者も、東方にいる者も西方にいる者も、[すべての者から] 命を奪う力をお与えになった。全世界は彼にとって、[目の前に]置かれた大皿のごときのものであり、彼の手は世界の隅々にまで届く。

<伝承>

次のような伝承がある。死の天使が立ち、そこには1本の木がある。すべての生物の数だけ葉をつけ、[葉には] 1人ひとりの名前が書かれている。葉が黄色になると、[死の天使は] 槍を手に取り、その葉をたたく。[すると] 葉が落ち、人は命を失う。

こういったことが言われているが、ザンダカ主義者 (zanādīqa)¹⁷⁾ はこのようなことを信じようとはしない。しかし私は、『クルアーン』が言及していること、そして『クルアーン』はイスラームの民の導き手であることのゆえに、『クルアーン』以外に信を置くことはなく、[ただひたすら] 『クルアーン』に従うのである。たとえ天使の種類や霊的なもの(聖霊) (rūhāniyān) の数を誰も知らないとしても、「そしてかれの外、誰もあなたの主の軍勢を知らないのである」[Q74: 31] というお言葉にあるように、創造主は別 [であり、すべてをご存じなの] である。

(p.28) この後は聖霊について一文を述べよう。ここでは2種の典拠に基づく。第1の典拠は啓典と伝承によるものである。第2の典拠は賢人たちの言説によるものである。これら2つの典拠を見れば、次のことがわかるであろう。不浄な大地や海、山、空は、[そこに] 住まう者なしに創造されたのではない。すなわち水には海のものたちがおり、山には獣が、荒野には野獣が、そして空には鳥がいる。一方、これほどまでに優美な諸天が、なぜ住まう者がなく、空っぽの状態だと言えようか。それは知性からかけ離れている。

<聖霊たちについて>

知れ。天使 [にはいくつかのグループや種類がある。そ] のうちのあるものは諸天を守り、シャイターンに石を投げつけるべく、力や威厳や炎を有している。またあるものは処罰のために、あるものは慈悲を施すために [創り出された]。また、それぞれ [の天使] には位階と居所がある。たとえばジブリールの居所は「最果てのスイドラ」であり、イスラフィールの居所は「玉座の下」である。ジブリールが見上げると、イスラフィールは星のように遠くに見える。

<伝承>

預言者——彼に平安あれ——は次のように言った。「ある日、ジブリールが私の前に現れた。彼

ム時代以前には繁栄した町だったとされる。本書第4部も参照のこと。

17) ザンダカ主義者(ズインディーク)は、狭義にはマニ教徒、さらにマニ教やゾロアスター教から改宗したものの、内面的にそれらの傾向を隠し持っているような人々を意味したが、単に異端、不信仰者を指す場合にも用いられる [Muhammad b. Ishāq al-Nadīm, *The Fihrist*. Ed. and trans. B. Dodge, Columbia University Press, 1970 (reprint in 1998), p.804; *EP: Zindīk*]. ここでいうザンダカ主義者が、単なる異端を指すのか、あるいは特定の傾向を持つ人々を指すのかは不明である。

は怖れ、恐怖のせいでも小さくなっていった。見る見るうちに、レンズ豆くらいにまで縮こまってしまった。私は尋ねた。『あなたに何が起こったのですか？』

「ジブリールは」言った。『イスラフィールが降りてきたので、私は怖くなったのだ。』

[伝承]

また別のハディースでは、次のように言われている。イスラフィールは玉座の下に立っており、頭上には、1000本の柱のある王冠を載せている。それぞれの柱の上には尖塔があり、それぞれの尖塔には天使が1人ずついる。その偉大さは創造主のみがご存じである。

<伝承>

別の伝承では次のように言われている。神には1人の天使がいるが、その上半分は雪から創られ、下半分は火から創られた。[その天使は]「火と雪を合わせられたお方に讃えあれ」と唱えている。

<伝承>

別の伝承では次のように言われている。楽園（firdaws）には乙女たちがいる。[彼女たちの]上半身は（p.29）赤いバラで創られ、下半身は白いバラで創られている。彼女たちは、預言者や金曜日（al-jum‘at）の礼拝を務める者たちのためにいる。

この乙女たちは楽園にいる。楽園は玉座の下にある。預言者——アッラーが彼に祝福と平安を授けられんことを——は言った¹⁸。「あなたたちがアッラーに天国（al-janna）を求めるときは、楽園（al-firdaws）を求めるがよい。」

ハディースの徒の見解では、要約すると、こういったことが言われてきた。

次に、天使と彼らの居所に関する先賢たちの言説を記そう。[それについても]そなたが知らないままではないように。

[天使の居所について]

知れ。イスラームの徒は、天国（bihišt）は第4天にあり、楽園は玉座の下にあると考えている。賢人たちは、[天の]南北の極（quṭb）¹⁹はいずれも天使たちの場所だと考え、天使のことを「靈（arwāh）」や「靈的なもの（聖靈）（rūhānī）」と呼んでいる。南の極[を中心とした南天]（quṭb-i janūbī）は、北の極[を中心とした北天]（quṭb-i šamālī）の2倍である。なぜなら太陽の運行は南天で起こるからである。ある部族には南天が見え、ある部族には両方が見える。それは2つの世界であり、「諸天国の家」と呼ばれている。無神論者たち（dahriyān）²⁰はそれを「永遠の家（dār

18) 「汝らがアッラーに求めるときは、フィルダウスを求めよ。これは天国の中心、最高の場所で、その上には慈悲深いアッラーの玉座があり、そこから天国の川が流れ出ている」というハディースを踏まえたものであろう [プハーリー『ハディース』（牧野訳、中巻、27、142頁、下巻、363頁ほか）。楽園（フィルダウス、ペルシア語ではフェルドウス）は、何層にも階層化される天国の中で最高の場所とされる。

19) quṭb は本来「極・枢軸・極点」を表す単語であるが、ここでの「南極（quṭb-i janūbī）」「北極（quṭb-i šamālī）」はそれぞれ「南天」「北天」に近い意味で使われていると考えられるため、以下では文脈に応じて訳し分ける。

20) 唯物論的な意見をもつ人々のこと。その定義は曖昧であるが、一般的には、時（dahr）は永遠であるとみなし、創造主の存在や天地創造、復活や来世を信じない者のことを指した。『クルアーン』で dahriyān に関する章句としては、たとえば、第45章24節「かれらは言う。『有るものは、わたしたちには現世の生活だけです。わたしたちは生まれたり死んだりしますが、わたしたちを滅ぼすのは、時の流れ（dahr）だけです』。しかしかれらは、これに就いて何の知識もなく、只臆測するだけである」がある [EF: Dahriyya; 岩波イスラーム辞典: 無神論]。

al-ḥuld)』と呼ぶ。だが我々は「楽園 (firdaws)」のことを「永遠の家」と呼んでいる。

< [天の] 極について >

さて、[天の南北] 2つの極について述べていこう。続いて、そこに住まう者たちのことを、賢人や自然主義者たち (ṭabāyī‘ān) の言葉に基づいて述べよう。

次のように言われている。お産に難儀する雌の動物はいずれも、[天の] 南極か、あるいはその周りをまわっている「スハイル (カノープス) (suhayl)』²¹⁾を見つめると、すぐに出産する。また、スハイルに向かって目配せをするラクダはじきに死ぬ、とも言われている。

一方、[天の] 北極では、7つの星がその周りをまわっている。それは「小熊 [座] (dubb al-aṣḡar)」と呼ばれており、目に炎症や疥癬のある人がこれを見つめると、その病は消え去る。『パピロンの書 (Kitāb-i Bābil)』²²⁾で私が読んだところでは、(p.30) 目に病気がある者は、日没から2時間経ったときに[天の北] 極に向かって立ち、銀の棒を混じりけのないバラ水に漬け、目の中に[滴を] 落として次のように言う。「おお、[天の] 北極の民よ。アッラーに私の健康を頼んでください」と。そして日曜日の夜から翌週の日曜日の夜まで[天の北] 極を見つめると、病は消え去る。また、『天の図像の書 (Kitāb-i Ṣuwar al-Falakī)』²³⁾では次のように言われている。黄疸のある者が[天の] 北極を見つめ、右手を肝臓の上に置き、左手を[天の] 北極に向けて伸ばし、「おお神の光よ。創造主に私の肝臓の治癒を求めておくれ」と言い、金曜日の夜から[次の] 金曜日の夜までこのようにすれば、黄疸は消え、肝臓はバランスのとれた状態に戻る。また私は『自然の書 (Kitāb-i Ṭabāyī‘)』²⁴⁾の中で読んだのだが、ヒンドの人たちの話として、ライオンやチーターやトラは病気になると[天の] 北極を見つめ、[病を] 治す。

これらの話はすなわち、「天を見ることは信仰儀礼であり、カアバを見ることは信仰儀礼である」と預言者——彼に平安あれ——が言っていることと同じであり、またそれは、「かれらは天と地の大権に就いて観察しないのか」[Q7: 185] という章句とも一致する。[預言者] ——彼に平安あれ——のいわく、「流れる水と緑を見ることは信仰儀礼であり、同時にそれは視力を増す。」

< 逸話 >

先人たちの書で、私は次のようなことを読んだ。雌のライオンは妊娠すると3日間正気を失い、何も食べない。その後、川か泉を目指し、脚の半分までを水の中に浸して立ち、[天の] 北極を見つめる。[3日間は産まずとも、] その難儀を免れる。

[天の] 北極の特性は、大部分が目の治癒である。特に、スハイルと「サソリの心臓 (アンタレス) (qalb al-‘aqrab)」と「ライオンの心臓 (レグルス) (qalb al-asad)」を見ることには「効果がある」。このことは知性ある者たちにとっては不可思議なことではなかろう。というのも、もし緑を見ることで視力が増すのならば、高みにある星々や天空のもろもろの光を見ることで、創造主のお力によっ

21) りゅうこつ座のα星。シリウスに次いで2番目に明るい恒星で、アラビア半島では南の地平線近くに見える [岩波イスラーム辞典: カノープス]。

22) イブン・ナディーム (10世紀末没) の『目録 (al-Fihrist)』には、この書名は見られない [Ibn al-Nadīm, *al-Fihrist*, Ed. Y.A. Tawīl, Dār al-Kutub al-‘Ilmiya, Beirut, 1996]。

23) 以後の本文中での関わりから、アル＝スーフイー (986年没) が著した『星座の書 (Kitāb Ṣuwar al-Kawākib)』を指すと考えられるが、この話は同書には載せられていないため、別書の可能性が高い。

24) イブン・ナディームの『目録』には、アブー・マァシャル (866年没) が著した『自然の書 (Kitāb al-Ṭabāyī‘ al-Kabīr)』なる作品が見られるが、同一の書かどうかは不明 [Ibn al-Nadīm, *al-Fihrist*, p.442]。

て〔視力という〕光が増すとしても、驚くことでは（p.31）あるまい。

私はここまで先人たちの言葉をもとに述べてきた。この後は〔天の〕両極に住まう何人かの聖霊について、賢人たちの言葉から述べよう。そなたがそれについて知らないままでいいように。

〔聖霊の性質について〕

知れ。〔創造主は、天の〕両極と諸天と天体を消滅するように創造されたのであり、不滅のものは創造主以外にはない、というのがスナナの徒の見解である。「地上にある万物は消滅する。だが（永遠に）変わらないものは、〔尊厳と栄誉に満ちた〕あなたの主の慈顔である」〔Q55: 26-27〕という至高なるお方のお言葉にあるとおりである。

〔問答〕

一方、天使や諸天は永遠である、というのが無神論者たちの見解である。彼らは言う。「天の物体や聖霊は本来的生命（*ḥayāt-i dātī*）を持っているが、それとは反対に、地上の人々はみな死すべきものである。この世界の物質や肉体は一時的なものである。生きているものというのは、生命がそのもののなかに偶有し、内在しているのであり、死と消滅はそれらすべてのものに及ぶ」と。

それに対して私は次のように答えよう。「天使たちは霊（*arwāh*）である」と彼らが言うことには同意する。だが、「天体ともども彼らは永遠である」と言うことについては、そうだとは思わない。私は、「それらには終わりがあり、滅亡するのだ」と答えよう。天の乙女（*hūr al-'ayn*）とともにある「永遠の家」のように永続するものというのは、その永続性は創造主が与えられたのであり、それ自体が本来的に永続するのではない。

また、「〔天の〕両極には4万の聖霊がいる」と言われていることには同意する。〔それは、〕「そして彼の外、誰もあなたの主の軍勢を知らないのである」〔Q74: 31〕というお言葉にあるとおりである。

4万の天使は姿かたちをかたどられ、呪い師たち（*mu'azzimān*）はそれらを用いて呪いをかける。シャムリヤーイーール（*Šamriyā'īl*）という名の天使は、呪い師たちが封印に用いるいくつかのものを除き、凶像を破壊した、と言われている。

<ある聖霊の話>

次のように言われている。〔天の〕極には1人の聖霊がおり、姿は人間で、両手はライオン、そして大きな翼を2枚持っている。下半身は魚に似て、尾は二股になっている。常に（p.32）〔天の〕極の周囲をまわっている。混じりけのない銅にその姿を描き、顔に麻痺のある者がそれを見つめると、顔は正常な状態に戻る。

〔天の〕北極の下には山があるが、ヒンドの言葉でそれは「ミールーン（*mīrūn*）」と呼ばれ、アラビア語では「大地のドーム（*qubba al-ard*）」と呼ばれている²⁵⁾。聖霊たちの居所である。聖霊た

25) 「ミールーン」は、校訂本ではBBRWNと綴られているが、別写本のMYRWN（もしくは巻末註のMYRW）を採る。仏教の宇宙観の中心となる須弥山（スメールまたはメール）を指すと考えられる。ヒンドゥー教の宇宙観においてもメール山は世界の中心であり、その頂上にはブラフマー神の大都城を中心として周囲八方にインドラ神、ヤマ神、ヴァルナ神など8神の壮大な都市があるとされる〔定方成『インド宇宙誌』春秋社、1985年、29、80-86頁〕。ビールニー（1050年頃没）は『星学入門（*Kitāb al-Taḥīm*）』の中で「大地のドーム」について次のように説明している。「大地のドームとは何か。それは東と西の間の経度の中間を意味している。また時として緯度がなないように描かれ、赤道にある。私はそれが真実であるとは証明しない。なぜならそれはペルシア人またはその他の見解であり、ギリシア人の書物にはその記述がないからである。インド人によれば、ランカには悪魔が住ん

ちはその山の頂にいる。ヒンドの人々には、彼らに関するさまざまな逸話がある。

<聖霊の話>

知れ。天使たちのあるものは、他のものよりも気高い。一部は優美さが際立っているために、聖霊が聖霊を見ても、その優美さゆえに聖霊だとは気づかないほどである。彼らは「聖霊の中の聖霊 (rūḥāniya al-rūḥāniya)」、「楽園のジン (jinn al-firdaws)」と呼ばれている。

自らを望む姿に変える力を持ったものたちもいる。彼らは空気のように澄んでいる。空気は色の無い物質であるが、太陽の光を受けると白くなり、また大地の影を映せば黒くなるというように、色を受け入れる。望むままに聖霊が姿を変えるのは、創造主の命による。死の天使が幸運な人には美しく良い顔を見せ、哀れな人には陰しく容赦のない顔を見せるのはこのためである。

いくつかの『図像の書』では次のように述べられている。[天の]南極には、人間の姿をした1人の天使がいる。顔は大きく、体は象のようであり、2枚の大きな翼を持っている。常に飛びまわり、じっとしていることがない。くぼ地の泥でこのような形の像を造り、火にかけて焼き上げ、それに墨で文様を施し、船に結びつけるならば、船が立ち往生したときには1人の老人が現れ出で、この像をかき抱いて[天の]南極に向ける。すると、すぐに船が動き出す²⁶⁾。

こういったことが言われている。[これまで見てきたように、]さまざまな特性や意味が (p.33) 生みだされるが、それが生み出されるのもまた、創造主の命による。被造物それぞれには英知がある。偉大なしるしの残る姿かたちは特に[そうである]。たとえ禁じられていようとも、人は不意に[美しい]ものを見ると陽気になり、竜や蛇の姿を見ると、恐れがその人の心に達するものである。この世界の中で私たちが見るものにはすべて形がある。星も天も月も太陽も[そうである]。賢人たちは姿かたちというものを、やみくもに定めたのではない。

<ある聖霊>

次のように言われている。カーフの山 (kūh-i Qāf)²⁷⁾には、チーターのような頭をした天使がいる。首は長く、大きな翼を持ち、その[大きな]翼の下には小さな翼がある。近くを飛ぶときは小さい翼で飛び、遠くに飛ぶときは大きな翼を広げる。これを泥で像にし、ライオンやヒョウや狼といった獰猛な野獣がいる地域の高台に置くと、猛獣たちはそこから700アラシユ²⁸⁾も遠ざかる。犬も立ち去ってしまうほどである。

こういったことが言われている。文責は伝え手にある。というのもこれらに関しては[これ以上の]情報はなく、決定的な論拠もないからである。それでも述べたのは、本書がこういったことに触れないわけにはいかないためである。

でいて、北極の下には『メール』と呼ばれる山があり、それは女王の住む所である」[Abū Rayḥān Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm li-Awā'il Šinā'āt al-Tanjīm*, Ed. J. Humā'ī, 1316-18s, p. 193 (矢野道雄・山本啓二訳、未公刊、第3部参照)]。

26) 10世紀後半のペルシア系の船主が、当時のムスリム船乗りの冒険談や奇談を集めて編纂した『インドの不思議 (Kitāb 'Ajā'ib al-Hind)』の中に、「船の天使たち」を奉るといふ、この記述に類似した逸話がある[アズルク・イブン・シャフリヤール編、藤本勝次・福原信義訳注『インドの不思議』関西大学出版・広報部、1978年、14-18頁]。

27) カーフ山は、イランの伝承にもとづく伝説の山であり、アルボルズ山に比定され、世界の端にあり神々の居所である。イスラーム時代の地理書にはよく登場し、ヤーカート(1229年没)などによると、世界を取り囲み、世界のすべての山の根元はカーフ山とつながっているとされる。また、空が青いのは、カーフ山にあるエメラルドの色の反射のためだともいわれる[EP: Kāf; Šihāb al-Dīn Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, Dār Šādīr, Beirut, 1984, vol.4, p.18]。

28) ひじから中指の先端までの長さを表す単位。およそ64cm。

第1章：北天・南天とそれらの星座について

[天の星々について]

知れ。北天は諸天に包まれており、12に分割（p.34）される。その向かいには南天があり、それもまた12に分割される。これら2つの極の間には「諸宮の帯（獣帯）（*minṭaqat al-burūj*）」があり、12の宮（*burj*）からなっている。宮にはそれぞれ後述されるような形がある。

知れ。賢人たちは、月宿や太陽の宮、年や月の数など、すべてについて非常によく調べており、それについて言うことは「何も」ない。ただし「それは」、彼らが自ら判断をくみず、至高なる創造主に判断を委ね、星の「運行から生じる」影響に委ねたりしない場合に限ってのことである。

さて、「[天の] 両極には48の星座があり、その外側には1025のはぐれ星（*kawkab-i biyābānī*）がある²⁹⁾。半分は「[天] 球（*kura*）の北側に、いくつかはもう一方の「[南] 側にある」と彼らが言っているのは、確かなことである。しかし、「ふたご座（*jawzā*）、ヘルクレス座（*al-jāī*）、へびつかい座（*ḥawwā*）、アンドロメダ座（*musalsal*）のように、あるものは人間の形であり、またあるものは、おひつじ座（*ḥamal*）、おうし座（*tawr*）、かに座（*saraṭān*）、さそり座（*‘aqrab*）、しし座（*asad*）、うお座（*ḥūt*）のように動物の形であり、またあるものは、てんびん座（*mīzān*）やおとめ座（*sunbula*）やかんむり座（*iklīl*）のように無生物の形である」と言っているが——これ以外の星については言及されていない——、それはすべて妄想である。これらは星の集合ではあるが、その姿かたちについて、彼らは適当に述べているにすぎない。

[北天の星座]

北天の星座の数は21だと言われている。

すなわち、「小熊（こぐま座）（*dubb al-aṣḡar*）」、「大熊（おおぐま座）（*dubb al-akbar*）」、「竜（りゅう座）（*al-tinnīn*）」、「ケフェウス（ケフェウス座）（*qīfāus*）」、「シンバルを持って叫ぶ人（うしかい座）（*‘awwā wa yuqāl la-hā al-ṣannāj*）」、「北の冠（かんむり座）（*al-iklīl al-shamāī*）」別名「鉢（*al-fakka*）」、「膝をついている人（ヘルクレス座）（*al-jāī*）」、「琴（こと座）（*al-šalyāq*）」別名「落ちていく鷲（*nasr al-wāqī*）」、「飛ぶ鷲（*nasr al-tāyir*）」別名「雌鷄（はくちょう座）（*al-dajāja*）³⁰⁾」、「椅子に座る女（カシオペア座）（*ḡāt al-kursī*）」、「ペルセウス（ペルセウス座）（*barsāus*）」別名「魔物の頭を持つ人（*ḥāmil ra’s al-ḡūl*）」、「手綱を操る人（ぎょしゃ座）（*mumsik al-a’inna*）」、「へび遣い（へびつかい座）（*al-ḥawwā*）」別名「蛇を扱う人（*mumusik al-ḥayya*）」、「へび遣いの蛇（へび座）（*ḥayyat al-ḥawwā*）」、「矢（や座）（*al-sahm*）」、「鷲（わし座）（*al-‘uqāb*）」別名「飛ぶ鷲（*nasr al-tāyir*）」、「ドルフィン（いるか座）（*al-dulfīn*）」、「馬の一部（こぐま座）（*qat’at al-faras*）」、(p.35)「大きな馬（ベガス座）（*al-faras al-a’zam*）」、「鎖に繋がれた女（アンドロメダ座）（*al-mar’at al-musalsala*）」、そして「三角（さんかく座）（*al-muṭallat*）」

29) ここから先の部分は、主にプトレマイオス（165年頃没）の『アルマゲスト』を念頭に置いていると考えられる。ここで言われているのは、「プトレマイオスの48星座」と呼ばれるもので、北半球の21星座、黄道十二宮星座、南半球の15星座を指す。現在使われていないのは、大きすぎて4分割されたアルゴ座のみであり、全天には1022の星（および3つの星雲）があり、その一部がこれらの星座を形作っている[プトレマイオス著、藪内清訳『アルマゲスト』恒星社、1982年、320-359頁]。ここでの著者の認識（48の星座と1025のはぐれ星）は正確ではないが、後出の箇所では、1025個の星が48の星座を構成している、と記しているため、ここはテキストに問題があるのだろう。

30) テキストでは「飛ぶ鷲すなわち雌鷄（はくちょう座）」と記されているが、「飛ぶ鷲」はアルタイルのアラビア語名であり、本来はわし座の星である。おそらくここでは、こと座のヴェガ（アラビア語では「落ちていく鷲」、より原語に近い意味では「留まっている鷲」との類推から「飛ぶ鷲」が誤って挿入（あるいは後代に混入）されたものと思われる。

である³¹⁾。

天文学者たちは、これらの星座は北天にあると言っている。また、それぞれの星座にはいくつかの星があると言われている。その各々については、熊は動物の章で、竜は蛇や竜の章で、カラスや鷲は鳥の章で、というようにそれぞれの章で述べていこう。なぜなら、[天の] 極というのは神聖な場所であり、かつ霊的な天使たちの居所であるため、それをクマやヘビの場所と考えることには同意できないからである。

ところで、天に、星の集合体からなる配列があるとすれば、それは「北のかんむり [座]」のようなものであろう。これは8つの星からなり、円状に配されている。ある者は、円形であるがゆえに「鉢」と呼び、またある者は「貧者の皿 (qaṣ‘at al-masākīn)」や「孤児の皿 (qaṣ‘at al-aytām)」と呼んでいる。その理由は、隙間があり、欠けているからである。この図はこの星の配置を示したものである [図]。

北天にある別の星座(こと座)は、「琴」とも「シンバル (ṣanj)」とも呼ばれており、11個の星からなる³²⁾。一般の人々は、これを「三脚台 (atāfi)」、「落ちていく鷲」、「シンバル」、「ガチョウ (iwazz)」、「タンブール (mi‘zafa)」、「亀 (sulahfāt)」と呼んでいる³³⁾。その配置はこのようになっている [図]。

また別の形のものを「三角 [座]」と呼んでおり、4つの星からなる。そのうちの2つは「朋友星 (anīsayn)」と呼ばれている。これがさんかく座の図である [図]。

[南天の星座]

知れ。天文学者らの言によると、南天には15の星座がある。

それは、「キートゥス(くじら座) (qītus)」、「圧制者(オリオン座) (jabbār)」、「河(エリダヌス座) (nahr)」、「ウサギ(うさぎ座) (arnab)」、「犬(おおいぬ座) (al-kalb)」、「(p.36)「先駆ける犬(こいぬ座) (al-kalb al-muqaddam)」、「帆船(アルゴ座) (safīna)」、「水蛇(うみへび座) (al-ṣujā‘)」、「水差し(コップ座) (bāṭīya)」、「大カラス(からす座) (ḡurāb)」、「ケンタウルス(ケンタウルス座) (qanṭūrus)」、「猛獣(おおかみ座) (al-sab‘)」、「炉台(さいだん座) (mijmar)」、「南の冠(南のかんむり座) (al-iklīl al-janūbī)」、「南の魚(南のうお座) (al-ḥūt al-janūbī)」である。

だが、私は、これらの星座の形についてここで述べることは適切ではないと思う。なぜなら[天の] 南極は天使たちの居所であり、犬やウサギの場所ではないからである。しかし、創造主が定められた星の配列や集合体のことは、否定はしない。たとえばコップ座——アラブ人はそれを「飼い葉おけ (mi‘laf)」と呼ぶ——は、7つの星で構成されている。さいだん座もまた7つの星であり³⁴⁾、[南の]

31) ここではアラビア語の原語を訳したものを最初に挙げるが、煩雑になるのを避けるため、以下では通常知られている星座名を使用する。「南天の星座」についても同様。それぞれの星座の構成星や星の配置、図絵については、アル＝スーフイーの『星座の書』を参照のこと [‘Abd al-Rahmān al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib al-Ṭamāniya wa al-Arba‘īn, Dā‘iratu’l-Ma‘ārifī’l-Osmania* (Osmania Oriental Publications Bureau), Hyderabad-Deccan, 1954]。

32) こと座を構成する星の数は、『アルマゲスト』や『星座の書』では10個である [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、326頁; al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, pp.67-69]。

33) ここに挙げられているアラビア語の多くは、「落ちていく鷲」にあたる α 星のヴェガを除き、現在ではこと座を構成する星の名前となっている。たとえば「琴」と訳出した「シャルヤーク」は β 星、「亀」と訳した「スラフファート」は γ 星にあてられている。

34) 現在のさいだん座は6つの星からなる。

かんむり座は「ドーム (qubba)」とも呼ばれ³⁵⁾、13 個の星からなる。これがそれらの図である [図]。

残りの星座は、冗長になってしまうので [すべてには] 言及しないが³⁶⁾、[いくつか挙げておこう。] たとえば、おおかみ座を伴ったケンタウルス座は、臍までは人の姿で、臍からは馬の姿をしている。顔は東を、尻は西を向いている。人と馬の部分は 36 個の星からなっている。その前方にあるおおかみ座は、18 個の星がある。アラブ人はケンタウルス座とおおかみ座のことを、「山々の頂 (šamārīḥ)」や「ハダール (ḥadār)」と呼んでいる。これらは南天にある。

あるいは南天にあるアルゴ座は、帆船の形をしており、40 個の星からなる³⁷⁾。この方向にある大きな星のことを「スハイル (suhayl)」と呼んでおり、別の星のことを「ハダールのスハイル (suhayl-i ḥadār)」、 「ワズンのスハイル (suhayl-i wazn)」、 「置き去りにされたスハイル (suhayl-i muḥlif)」と呼んでいる³⁸⁾。スハイルは、緯度が [北緯] 38 度までの諸都市で見える。

[問答]

もし、「土でできたこの世界は図像の世界であり、古い時代にはさまざまな図像がつくられていた。拝火殿や僧院に絵画や彫像がなかったことはなく、いにしえの王たちは (p.37) ライオンや象の姿を描き、旗頭に据えてきた。一体いかなる英知でもって、預言者——彼に平安あれ——は [図像を] 禁じ、『復活の日に最も厳しく罰せられるのは、描く者たちである』³⁹⁾と言われたのか」と問われたならば、次のように答えよう。

造形や創作は創造主の仕事であり、被造物の仕事ではない。だからこそ、人が動物を形づくりと罪人となる。というのも、形づくりは動きを与え得ることになるからである。形あるものを動かすのは創造主であり、図像をつくることは誰にも許されない。もしつくるならば、罪人となり、非難されよう。さらには、図像をつくるのが禁じられているのに、どうして図像を崇めることが禁じられていないはずがあるうか。

この後は高き諸天の驚異について述べよう。[アッラーは正しいことを最もよく知りたまう。]

第2章：天界と諸天の驚異について

至高なるアッラーのいわく、「またわれは、あなたがたの上に堅固に7層 (の天) を打ち建てた」 [Q78: 12]、すなわち [ペルシア語では] 「われこそは、おまえたちの上に7つの天をしっかりと建

35) 『星座の書』には、アラブ人が南のかんむり座を「ドーム」と呼ぶことが記されている [al-Šūfī, *Šuwar al-Kawākib*, p.244]。

36) この一文は、おそらく次のアルゴ座の段落の後に続くものと思われる。テキストは、「残りの星座については、冗長になってしまうために言及しなかった」と過去形になっている。また、この文章の後にある、ケンタウルス座の話の冒頭は、「同様に (ham ʿo)」と始まっており、前の段落から続く、星座の構成に関する話と考えられる。ちなみにサーデギー本では、「北天の星座」「南天の星座」の部分はすべて省略されている。

37) 『アルマゲスト』では、星の数はそれぞれ、ケンタウルス座 37、おおかみ座 19、アルゴ座 45 であり、『星座の書』では、ケンタウルス座 36、おおかみ座 19、アルゴ座 45 となっている [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、352-357 頁; al-Šūfī, *Šuwar al-Kawākib*, pp.304-307, 334-338]。

38) 「スハイル」は前出のようにりゅうこつ座の α 星 (カノープス) のことであり、現在、アルゴ座を分割して作られたほ座、とも座、羅針盤座、りゅうこつ座の中には、「スハイル」の名を冠される星がいくつかある。「スハイル・アル=ワズン」は、ほ座の λ 星、「スハイル・アル=ムフリフ」は同じく ψ 星である。また「スハイル・アル=ハダール」は、とも座の ζ 星である。ちなみに、「南天の星座」の節の典拠は主にアル=スーフイーの『星座の書』であり、ケンタウルス座の姿や向き、星の別称などに関して同一の文章が多々見られる [al-Šūfī, *Šuwar al-Kawākib*, pp.307, 323, 333]。

39) ハディース集でもしばしば見られる表現である。たとえばブハーリー『ハディース』(牧野訳)、中巻、924 頁など。

てた神である」と。またいわく、「[またかれこそは] 真理をもって、天と地を創造された方である」[Q6: 73]、つまり「ペルシア語では」「われは英知でもって創造したのであり、いたづらに創造したのではない」と。

知れ。創造主は、驚くべきことに、諸天を水の蒸気から、また大地を水の泡から、山々を水の波から創造された。この言説は正しい。一方、盲従しがちな一部の話し手たちは、「第1の天は金で、2番目は銀、3番目はルビーで創造された」と言い、こういったことを縷々数え上げている。天文学者や自然主義者たちは、「7天は目ではわからないほど[ゆっくりとした]速さで(p.38)回転している」と考えており、その速さを、金や銀が融解するときの動きにたとえている。すなわち、[金や銀は]融けるときに上へ下へと移動するが、それはあたかも止まっているかのような速度である。天の回転もまた同様の状態であり、その移動と回転の速さは、止まっているように見えるほどである。

<伝承>

カアブ・アル＝アフバルがある日、言った。「7つの天は自らの極を[中心に]動いている。」

アブドゥッラー・ブン・アッバースがそれを聞き、言った。「カアブはいまだにユダヤ教徒の見解をもち、天が[自ら]動いている、などと言っている。」

カアブは尋ねた。「どのように言いましょう？」

[イブン・アッバースは] 答えた。「創造主は、『本当にアッラーは、天と地の運行が外れないよう支えられる。もしそれら両者が、外れることがあるならば、かれを置いて何もかもこれを支え得るものはない』[Q35: 41]とおっしゃっているが、それはつまり[ペルシア語では]、諸天と大地は、[自らの]場所から動かぬようにわれが支えており、もしそれが[自らの]場所から動き出すならば、神以外の誰がそれを支えられようか、ということである。それなのに、おまえ、カアブは、[天が]動くと言っている。」

こうしてイブン・アッバースは、このような発言を受け入れなかった。

これがハディースの徒の見解であり、彼らはこれ以上のことは認めない。

さてこの後は、そなたが知ることができるよう、このことに関する賢人たちの言説を述べよう。私がこの書物を『世界を示す杯 (*Jām-i Gūī-namāy*)』と名づけたのは、それぞれの集団がどのような見解を持っているかを、そなたに明らかにするためなのだから。

<諸天とその創造について>

知れ。賢人たちが天の本質について述べているが、誰も[それが]何であるかを知ることはない。もし天が水からできているのであれば、低い方へ行こうとするだろうし、もし風からできているならば、空気と混じり合ってしまうだろう。土からできているならば、土の方へ向かおうとし、火からできているならば、太陽と同じ色になるだろう。ただ創造主のみが、それが何かをご存じなのである。[ちなみに] 天は5番目の元素であるとも言われている。

最も小さな天は「月天 (*falak al-qamar*)」であり、それは我々に最も近い。2番目は (p.39)「水星天 (*falak-i 'uṭārid*)」、3番目は「金星天 (*falak-i zuhra*)」、4番目は「太陽天 (*falak-i āftāb*)」、5番目は「火星天 (*falak-i mirrīḥ*)」、6番目は「木星天 (*falak-i muṣṭarī*)」、7番目は「土星天 (*falak-i zuhal*)」である。それらすべての上に「恒星天 (*falak al-burūj*)」があり、ほかのすべての星々がそ

こに固定されている。これら7つの星以外は動かない。

ヒンドの人々は、「天は万物の源である」と言い、[天を]「ブラフマーンド (barahmānd)」⁴⁰⁾と呼んでいる。また、「アトラス天 (falak al-atlas)」とも呼び、それを崇拝している。彼らは言う。「これ以上に偉大な被造物を我々は見たことがない。太陽でさえ、それに比べると単なる円盤にすぎず、空気や風の世界は、その内部に収まっている。[この]世界でさえ、その中ではコンパスの点にすぎないのだ」と。

彼らはこのような憶測から天を崇拝し、「天体はすべて丸く、球形であるが、円球は三角や四角よりも欠損の害に強い」と言う。このような戯言は、中途半端な考え方や憶測から得られたもので、理知的な書物や明白な証拠から得られたものではない。

[人間の知覚の限界について]

知れ。ある無神論者が天に目を向けた。だが彼は、それよりも大きなものの姿が目に入らず、天を創造するものについて知ることはなかった。天を仰ぐ〔我々の〕目というのは、象の体を見る〔1匹の〕蚊の目ほどにしか見てとることはできないのである。

次のようなたとえ話がある。蚊の一群が象を見るために出かけた。あるものは象の頭にとまり、あるものはその足に、またあるものはその鼻に、あるものはその耳にとまり、そして帰ってきた。

1匹の蚊が尋ねた。「象とはどのようなものだったか？」

足にとまったものが言った。「象は、柱のようだった。」

鼻にとまったものが (p.40) 言った。「象は、竜のようだった。」

頭にとまったものは言った。「象は、山のようだった。」

耳にとまったものは言った。「敷物のようだった。」

それぞれの目は、見たこと以上のことには気づかず、ただ見たことについてのみ話したのである⁴¹⁾。

たとえるなら、この天の下にいる我々は、王の宮殿で1つの穴やアーチを通して見て、そのアーチこそが全世界であると考え、1匹の蟻のようなものである。宮殿〔全体〕や街区や町について何ら知識を持たず、ましてやその地域や国土のことなど、知るよしもない。一方、自らを賢人とみなしている短絡的な人々は、太陽に目を向けた者は太陽を拝むようになり、天に目を向けた者は天を崇拝すべきものとした。彼らはそれ以上考えることもなく、創造主が「諸世界の主 (rabb al-'ālamīn)」であり、1万8000の世界をお創りになったのだ、ということに気づかないまとなってしまった。[1万8000の世界のうちの] 1つは太陽がその中をまわって [いるこの世界であり]、1万7000[の世界]はこの世界の外にある⁴²⁾。それらすべてに、創造主という創り手がいるのである。

40) 「ブラフマー神の卵」の意で、ブラフマー神 (brahmā) と卵 (and) の結合語。原始宇宙に浮かび、その中で創造神ブラフマーが世界を創造するとされる [定方晟『インド宇宙誌』、72-74頁]。

41) ガザリーの『幸福の錬金術 (Kīmiyā-yi Sa'ādat)』では、天文学者や自然主義者が蟻にたとえられて批判された直後に、これと同様の物語が載せられており、そこでは蚊の立場にあるのは盲人である [Abū Hāmid Muḥammad Gazālī, *Kīmiyā-yi Sa'ādat*, Ed. H. Ḥadīwjam, Intiṣārāt-i 'Ilmī wa Farhangī, Tehran, 1380s, p.59]。さらにこの物語は、サナーイー (1134年没) の『真理の園と道の掟 (Ḥadīqat al-Ḥaqīqat wa Šarī'at al-Ṭarīqat)』でも見られ [Abū al-Majd Sanā'ī, *Ḥadīqat al-Ḥaqīqat wa Šarī'at al-Ṭarīqat*, Ed. M. Riḍawī, Intiṣārāt-i Dānišgāh-i Tihārān, Tehran, 1377s, pp. 69-70]、当時よく知られた話だったようである。もともと仏教説話であったと考えられ、日本でも「群盲象を評す」という成句がある。

42) 単純に計算すると、1つの世界がこの世界であれば、残りは1万7999。

[逸話]

次のように言われている。あるアラブ人が荒野を歩いていると、ある人が彼に尋ねた。「世界に創り手がいることは、どうしてわかるのだ？」

アラブ人はあたりを見回し、荒野にラクダの糞が落ちているのを見て、言った。「糞はラクダがいた証拠であり、足跡は旅人がいた証拠である。ならば、これほど優美な天のかたちやこれほど卑しい下界の地上こそは、知悉者たる創造者の証拠である」と。すなわち [ペルシア語では]、「地面の足跡は人が通った証であり、糞はラクダが存在する証である。これほど高き天とこれほど低き大地が、創り手なしでどうやって現れたのか。」

(p.41) <天が有限であることについて>

知れ。天はこれほど大きく偉大だが、有限である。なぜなら、大地は天に包まれ囲まれているからである。もし天が何か別のものの中にあるならば、それは天よりも大きい。必然的に [天は] 有限ということになる。

<問答>

もし、「天の向こうには何があるか」と聞かれたら、「別のさまざまな世界がある。だがそれは、至高なる造物主のみが知り得るのだ」と答えよう。なぜなら、広大な荒野の中にたった1本の草しかない、ということはある得ず、同様に、創造主の王国の中に1つしか世界がない、というのもあり得ないからである。その上、[創造主は] 自らを「諸世界の主」と呼んでいる。

天と [この] 世界の外側にはいかなる世界もない、と言う者もいる。彼らは、自分たちの目で捉えられないものは、それ自体が存在しない、と考えている⁴³⁾。しかし、世界はたくさんあるということは揺るがない。「多い少ない」は有限さの中で生じるものであり、よって「世界は有限である」ということが証明された。

[天が生きものではないことについて]

知れ。イスラームの民の見解は次のとおりである。天は無生物であり、力を加えられて [動いて] いる。力を加えてそれを回転させているのは、神である。その回転の周期は造物主——その名が讃えられんことを——の完全なるお力による。

天は生きものであると言う者もいる。蟻や蚊にも生命があるのだから、最も偉大な物体である天にも生命があるはずだ、と。さらに、創造主 [自ら] が、「7つの天は、かれを讃える」[Q17:44]、すなわち [ペルシア語では]「諸天は神を唯一なるものと呼ぶ」とお伝えになっている。そこで彼らは、[讃えたり呼んだりする天は] 生きものである、と言うのである。さらには、天は光り輝いているのに、その中に衰弱や死の兆しが (p.42) 見られないことが、[天が] 生きものであることの証だとも言う。またある者は、天には聴覚と視覚があり、それ以外の感覚は必要としない、と言っている。

だが、これらすべてをもってしても、[天が] 生きものであることの証拠とはならない。というのも、

43) この一文「天と [この] 世界の外側にはいかなる世界もない……と考えている」はおそらく「問答」の前に配されるものであろう。続く接続詞は“pas” (ゆえに、従って) なので、「問答」の「答え」の最後の一文「創造主は自らを諸世界の主と呼んでいる」を受けて、「ゆえに、世界はたくさんある、ということ揺るがない」という文章に続くと考えられる。

スピネルやルビーなどの宝石は、いずれも光り輝いているが、無生物である。もし天が生きものであるとするならば、その運行の周期は一定にはならないであろう。あるいは回転することにより、天が疲労困憊し、休息を必要とする事態が生じるであろう。ゆえに、[天は] 生きものではなく、[天には] それを動かす者がいる、ということが明らかとなる。知れ。気高いということは、生命を持っていることではない。犬やハエも生命を持っているが、気高くない。

太陽や星についても、同じことである。それらが生きている、と言う者もある。星辰崇拝者や多神教徒たちは、このような議論に対して、いくつかの論拠を持ちだそうとする。トゥルクスタンでは木星のことを「崇拝されるもの (ma'būd)」と呼んでいる。だが、「星は無生物である」と言う人々は [そのようなことを] 拒絶する。あるいは、金星は太陽の恋人であり、太陽から離れることはない、とも言われている。このような数々の迷信が語られているのである。創造主が、我々をこのような迷妄からお護りくださいますように。

さて、天体の寿命の長さに関する一文を記そう。

< [諸天の寿命の長さ] マギたち (majūs)⁴⁴⁾ の迷妄 >

知れ。太陽崇拝者や無神論者たちは、諸天や惑星の寿命を観察したが、そこにいかなる変化も見出さなかったため、それらを崇拝するようになった。

知れ。諸天や光る[星々]の寿命の長さは、[それらを]崇拝することの根拠とはならない。なぜなら、創造主はおっしゃっている。「本当にあなたがたの主はアッラーであられる。かれは6日で天と地を創った」[Q7: 54]、すなわち [ペルシア語では] 「われは諸天を4日で創造し、大地を2日で創造した」と。

伝承には次のようである。「[創造主は] 世界の寿命の長さを7アマド⁴⁵⁾と定めた。預言者——彼に平安あれ——が生まれたときには、6アマドが過ぎていた。彼の誕生から時の終わりまで1時代 (qarn) が残っているが、そのあと世界は消滅する」と。

無神論者たちは、「この世界は、いつも星々とともにあったし、これからも同じように存続する」と言っている。またある者は、「世界の寿命は (p.43) 4兆3億2000万年である」と言う。もし彼らが言うとおりでとしても、それでもやはり、[天の寿命には] 限りがあり、限りがあるならば、終わりがあるということになる。

「ヌーフ (ノア) (Nūh) ——彼に平安あれ——の大洪水のときから預言者——アッラーが彼に平安と祝福を受けられんことを——の生誕、およびマッカからマディーナへの移住にいたるまで、3725年の時が経過している」と言う者もある。彼らは長き寿命を数え上げ、そうして世界が永続するという誤謬に陥るのである。

次のように言われている。「世界が創造された最初の日、7つの惑星は白羊宮の最初の度数にあった。その時点から、運行 [周期] の差異に応じて [惑星は] それぞれの宮ごとに進んでいき、ついにはすべてが双鱼宮に集まり、そして再び白羊宮に戻るのである」と。

また次のように言う。「ミスル (Miṣr)⁴⁶⁾ の境域にあるハラマーン城砦の門には、『ハラマーン城

44) アラビア語 (およびペルシア語) の “majūs” は、ゾロアスター教の祭司である「マギ (マゴス)」に由来し、一般的にはゾロアスター教徒のことを指す語として知られるが [EF: Mađjūs]、この時代は広く「異教的思想をもつ人々」として使われており、ここでも特定の宗教や信仰を指すのではなく、異教を信仰する人々の総称として使われている。

45) 非常に長い時間を示す単位。

46) 現在のエジプトのこと。

は建てられた。そのとき両鷲(al-nasrān)が巨蟹宮にあった』、すなわち[ペルシア語では]『これが建設された日、飛ぶ鷲(アルタイル)と落ちていく鷲(ヴェガ)は巨蟹宮にあった』と書かれている。現在、それら[の星]は、磨羯宮に達している。各宮は30度あり、1度移動するのに100年かかる⁴⁷⁾。恒星の寿命がどれほどのものか、考えてみるがよい。』

彼らはこのようにして、世界の寿命や星の年齢について縷々述べている。しかし私は、それらが長い寿命をもっていることには同意するが、永遠に存続するとは思っていない。

さて、寿命の差異について、別に一文を記そう。

<寿命の差異>

知れ。ヌーフ——彼に平安あれ——の寿命は、1000年に50年欠けるものだった。ルクマーンの寿命は3000年だった。ジャムシードの寿命は900年だった。700年という説もある。ラーフーン(Lāhūn)⁴⁸⁾の王の寿命は700年、ザッハーク(Dahḥāk)⁴⁹⁾の寿命は1000年だった。これらの寿命は、創造主がそれぞれに[長さを]違えてお創りになったのであり、いずれもみな死のシャーベットを味わった。

(p.44) 1人の無神論者が、太陽や星や天に衰え[の兆し]がなく、つねに同じように光り輝いているのを見て、[それらは]そのままあり続けるだろうと考えた。彼は、寿命がそれぞれ異なると知らなかったのである。ハゲタカの寿命は鴨や鷹よりも長く、鴨や鷹の寿命は蚊やハエの寿命よりも長い。蚤や蚊の寿命は40日である。

<逸話>

カァブ・アル=アフバルは次のように言っている。「蚊の寿命は3日である。蚤の寿命は5日である。ハエの寿命は40日である。甲虫(hunfasā)の寿命は1年である。キジバト(warāṣān)の寿命は100年である。ジュズカケバト(fāḥṭa)の寿命は80年である。ドクトカゲ(sāmm-i abraṣ)の寿命は1年である。ハイエナの寿命は50年である。ロバの寿命は40年、ラバの寿命は50年、象の寿命は700年、カラスの寿命は1000年、ハゲタカの寿命は700年、鷲の寿命は1000年、ヒョウの寿命は300年、ライオンとチーターの寿命は100年、蛇の寿命は6000年である。」

知れ。小麦の穂の寿命は1ヶ月であり、樗や胡桃の木の寿命は300年、オリーブの木の寿命は3000年である。「フィラスティーン(Filasṭīn)⁵⁰⁾には、ギリシア(Yūnān)の時代からのオリーブの木が残っている」と言われている。「ちなみに」ギリシアとはルームの人々よりも前[の時代]のことである。一方、カボチャを糸杉や柘植の木と比べるならば、寿命に違いがあることがわかるであろう。ゆえに、たとえ天や星の寿命が長いとしても、永遠に存在するという論拠とはならない。

47) 恒星であるヴェガやアルタイルが実際に黄道十二宮の上を移動した、という意味ではない。歳差運動によって春分点が移動すると、春分点を起点とする黄道十二宮と恒星の位置関係が変化していく。この変化を、黄道十二宮の方が固定されていると考え、恒星が黄道十二宮上を移動しているかのように表現しているのである。プトレマイオスは、しし座のレグルスに対するヒッパルコスの見測結果等を踏まえ、春分点が「100年に1度」東に移動すると述べている[プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、308-310頁]。

48) 本書第3部では、「ラーフーンの川(nahr al-Lāhūn)」として名が挙がり、中エジプトのファイユームの水源とされる。ヤークートは、「上エジプトにある町。Yūsuf al-Ṣiddīqのモスクがある。ファイユームに水を巡らせるための水門がある」と伝える[Yāqūt, Mu'jam al-Buldān, vol.5, p.9]。

49) イラン神話上の王朝であるビーシュダード朝の王。両肩に蛇を生やした暴君として知られる。ジャムシードを倒し、1000年間統治した[EF: Zuhāk]。

50) パレスチナのこと。

なぜなら、あらゆるものには終わりと限りがあるからである。

<逸話>

次のように言われている。ヒンドの地に長命な人がいた。1000年以上も前のいろいろな話を語り伝えた。ヒンドの人々は彼を重んじ、尊敬していた。[彼は] 高い山の上におり、容貌は厳めしく、背は高かった。王たちが彼のもとに参じると、(p.45) 厳しい苦行(mujāhida-hā)を彼らに命じるのだった。彼の課す難行は、たとえば、ヒンド人に「自分を焼け」と言うのと、[その者は] 即座に自らを火に投じる、というようなものであった。

長い時代が過ぎ、この話がマームーン (Ma'mūn)⁵¹⁾ に伝えられた。マームーンは人を遣って、大金をもたせて送りだした。この行者に会って話を聞き、自分に知らせるためである。[使いの男は] 長い時間をかけてこの行者を見つけ出し、彼に尋ねた。「貴方は預言者——彼に平安あれ——の教友たちの中では誰を見ましたか？」

[行者は] 言った。「わしはアリー ('Alī)⁵²⁾ を見たぞ。イブン・ムルジャム (Ibn Muljam)⁵³⁾ が短剣で切りつけおったわい。それにウスマーン ('Uṣmān)⁵⁴⁾ を見たぞ。騒動の中で殺されおった。ウマル ('Umar)⁵⁵⁾ を見たぞ。アブー・ルールー (Abū Lu'lu')⁵⁶⁾ が殺したのう。アブー・バクル (Abū Bakr)⁵⁷⁾ を見たぞ。カリフの座についた輩じゃな。預言者を見たぞ。マッカを征服しおったわい。イーサーを見たぞ。死者をよみがえらせおった。ムーサーを見たぞ。水の中にファラオ (fir'awn) を沈めおった。それに、ヌーフの大洪水やアード ('Ād) の暴風⁵⁸⁾ を覚えておる。カービール (カイン) (Qābīl) がハービール (アベル) (Hābīl) を殺すのも、わしは見たぞ。」

この[使いの]男は言った。「私はこのようなことは信じられませんし、認められません。ですが、貴方のお顔やお姿を見てみると、[貴方の中に] 恐ろしげな相が見えるのです。それは貴方が真実を語っている証拠でしょう。」

[行者は] 言った。「わしの中に何が見えるのじゃ？」

[男は] 言った。「貴方は、まるで象のように、2本の牙を持っています。貴方が語ると、貴方の口からは炎の息が出てきます。貴方の内にあるものは、人間というよりもシャイターンのです。ところで、もし貴方に質問をしたら、本当のことを言ってくれますか？」

[行者は] 言った。「言ってみようぞ。」

[男は] 尋ねた。「貴方は人間ですか、それとも悪鬼 (dīw) ですか？」

51) アッバース朝第7代カリフ（在位 813-833年）。父である第5代カリフ、ハールーン・アル＝ラシード（在位 786-809年）の死後、ホラーサーン地方を拠点として、弟の第6代カリフ、アミーーン（在位 809-813年）と対立した。812年にマルヴでカリフ位を宣言し、819年にバグダード入りを果たした。

52) 第4代正統カリフ（在位 656-661年）であり、シーア派にとっては初代イマーム。661年、ハワーリジュ派の刺客に暗殺された。

53) 661年にアリーを暗殺したハワーリジュ派の刺客。アリーはイブン・ムルジャムに刺されてから数日後に死んだとされる [EF: Ibn Muljam]。

54) 第3代正統カリフ（在位 644-656年）。

55) 第2代正統カリフ（在位 634-644年）。

56) バスラ総督 al-Muḡira b. al-Su'ba のペルシア系奴隷。正しくは、Abū Lu'lu'a。644年にウマルを暗殺した [EIr: Abū Lo'lo'a]。

57) 初代正統カリフ（在位 632-634年）。

58) アードは、ヌーフの後の時代に栄えた部族として『クルアーン』でしばしば言及されている。それによると、アードの民の1人である預言者フード（最初期のアラブの預言者5人のうちの1人）は、同朋にアッラーへの帰依を求めたが拒まれた。彼らは飢饉に襲われたが、それでもアッラーを受け入れなかったため、ついには暴風によって滅ぼされたという [EF: Hūd, 'Ād]。

[行者は] 言った。「知れ。わしはイブリース (Ibrīs)⁵⁹⁾ であるぞ。サランディーブ (Sarandīb)⁶⁰⁾ の地からやってきたのじゃ。[かつては] 誰もが英知と学識をめぐって諍いをしておった。わしは人間の姿でこの山に現れ、やつらの[言う] 賢人とやらものに、わしの言うことを聞かせるようにしてやった。やつらの知性など、いい笑いものであるぞ。自分を火の中で焼いているくらいじゃからな。おまえはマームーンに伝えよ。いかなるアードムの末裔にも (p.46) わしほどの寿命はないのだと。」

この逸話の意図するところは次のとおりである。寿命というものは千差万別である。ハトやジュズカケバトがハゲタカの寿命を知ったところで、[ハゲタカは] 決して死なないのだと思うだろう。なぜならハトがハゲタカの死を見ることは、決してないのだから。一方、この土の世界ではすべての事物が変化するが、天体では[何ら] 変化が見えないために、道を踏み誤る人々は[天体は] 永遠で不滅であるかのように考えてしまうのである。

青菜や果物は石やガラスよりも早く腐敗する。青菜は[わずか] 1日で、金や銀やルビーやガラスが100年かけてもそうはならないほどに腐る。一方、天にあるものや星もまた消滅するが、それは、野菜が腐る時間に対して金やルビーが消滅するのと同じくらいの比率の時間がかかる。また、天や宮の消滅は、枯れたり溶けたりするのではなく、引き裂かれたり粉々にされたり割られたりするものである。至高なるお方のお言葉に、「その日、天は雲と共に裂ける」[Q25: 25] とあるように。

「永遠である (bāqī) とは「滅しない (lam yazul)」ということであり、世界には[必ず] 消滅があるのだと知るには、この程度で十分であろう。この世界のあとには別の世界がある。

さてこれからは、月と太陽の驚異について述べよう。至高なるアッラーが望みたまうならば。

第3章：太陽の驚異とその諸性質について

至高なるアッラーのいわく、「また太陽は、規則正しく運行する。これも全能全知な御方の摂理である」[Q36: 38]。創造主は被造物に恩恵を施されている。「われは天に太陽をめぐらせた」とおっしゃっているように。

[太陽は] 世界を秩序づけ、世の中に光を与え、果実を熟させ、草木を地面から引き出す。海からは蒸気を取り出すが、[その蒸気は] 大気中で雲となる。そして乾いた大地に雨が (p.47) 降り、世界の繁栄がもたらされる。さらに[太陽の] 熱によって、タールやピッチ、ナフサ、塩、水銀、硫黄、金、銀、銅、鉄といった鉱脈が地中に生じる。そなたが目にするこれらの驚異たるや、完璧ではないか。太陽が沈むと、あらゆる動物は穴の中に逃げ込み、あらゆる生きものは死者のような体勢で眠り込む。世界中が黒く、暗くなってしまう。そして太陽が東から頭を出すと、すべてのものが動き始める。静かだった鳥たちは歌い出し、さまざまなメロディーで創造者を讃える。獣や動物は穴から這い出し、[この世の] すべての住人が動き出す。庭に行き、手入れされた木々を見ると、心が和むであろう。[だが] 太陽が沈んでしまうと、そなたは思う。「それぞれの木が魔物 (gūl) であり、枝は剣なのだ」と。樹上ではフクロウが啼いている。太陽が昇り、世界が一変する朝が来

59) 神の命令に反して、アードムに跪拝しなかったため、火獄行きを宣告された墮天使。火から創造され、悪魔の固有名ともされる [岩波イスラーム辞典：イブリース]。

60) 現在のセイロン島とされる。本書第3部も参照のこと。

るまでは。

[太陽という] あの被造物の驚異について述べるならば、この本は長くなってしまおうだろう。太陽の影響は明らかである。蠟や油のように、あるものは[太陽の]熱によって柔らかくなり、またあるものは泥のように固くなる。[太陽は]皮膚を黒くし、ツバメやフクロウを盲にするが、ほかの動物には光を与えて見えるようにする。井戸に閉じ込められた人が盲になるのもこのためである。なぜなら目が見えるようになるのは、太陽の光のおかげであり、光がその人に届かなければ、盲になってしまうのである。一方、目を太陽に向け続けると、その光のせいで盲になる。また日陰で育つ木は、猛毒の実をつける。とりわけイチジクの木[がそうである]。

[太陽の光は上に向かうことについて]

知れ。太陽や惑星や恒星や天の物体は、蠟燭や火と同様に、上に向けて光を発す。蠟燭を逆さまにしたところで、火は上へと向かっていくであろう。最も下層のこの世界にある太陽の光の量は、蠟燭が(p.48)塔の上で燃えるのと同じくらいであり、下に落ちてくる光はわずかであり、本来の光は上に向かう。考えてもみよ。第4天⁶¹⁾の彼方から、これほどの光がこの世界へ、下[にある地上]へと太陽から降り注いでいるのである。ならば、その上に注がれる光線はどれほどのものであろうか。第4天の上にはどれほどの光があるのだろうか。至高なるアッラーのいわく、「かれこそは太陽を輝かせ、月を灯明とされた」[Q10:5]。

さて、星や宮について説明していこう。創造主がそれらへの誓いについて言及されているのだから。「諸星座のある天において(誓う)」[Q85:1]、「わたしは、沈んでゆく星にかけて誓う」[Q56:75]と、そのお言葉にあるように。

[まず、]太陽について言われていることの中から、その大きさについて簡単に述べよう。

<太陽の性質とその大きさについて>

知れ。創造主は太陽(šams)や星を平らなものではなく、球形にお創りになった⁶²⁾。太陽は昇ってから、天頂(samt al-ra's)に達し、そして西の果てにいたるまで、一定[の大きさ]である。もし平面であれば、[太陽は]昇り始めるときにはより小さく、天頂ではより大きくなるはずである。なぜなら、[天頂では]より近くなるからであり、再び遠ざかるときには欠けて見えるはずである。さらにはすべての町で一斉に日が昇らねばならない。しかしその大きさにもかかわらず、[太陽は]東にあるときも西にあるときも同じに見える。[太陽の]大きさは地球(jirm-i zamīn)の160倍である⁶³⁾。

夜が訪れ、[太陽が]大地の下にいくと、太陽の上[にある大地]は、盾の上にあるディルハム銀貨のようになり、大地のあらゆる方向から、太陽の[光の]滴が外へ溢れだす。端[から洩れる]

61) すなわち「太陽天」のこと。

62) プトレマイオスの球体論も参照のこと [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳、4-9頁)。ただし、ここから先で著者の言う「太陽」や「星」が恒星や惑星そのものではなく、「太陽天」や「恒星天」を指している可能性があることも指摘しておきたい。

63) ここでは“masāhat”を「大きさ」と訳したが、プトレマイオスやビールーニーの著作の日本語訳では「体積」という訳語が使われている。プトレマイオスによると、太陽の体積は地球の約170倍、またビールーニーによると、太陽の体積は地球の約166倍(あるいは167.20倍)である [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、238頁; Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, p.155 (矢野・山本訳、第2部第4章)]。なお、“zamīn”という単語には、基本的に「大地」という訳語をあてているが、“jirm-i zamīn”あるいはこの後に類出する“kura-yi zamīn”という場合に限り、「地球」という訳語を使用する。後二者の語が使われているのは、ビールーニーの書など、別の書籍(おそらくはアラビア語)から、天体の距離や大きさを著者がそのまま引用している場合が多い。

太陽の光は水星天まで昇っていき、光はそこでひとつに合わさる。大地の影は、光の中で円錐形に残り、太陽の光線を避ける。[つまり] 柱の周囲でランプをまわせば、柱の影がまわる [のと同じである]。

(p.49) <太陽の運行速度について>

知れ。太陽は第4天から照らしている。その上には3つの天があり、その下にも3つの天がある。[太陽が] 天を移動する速度は、人間が[歩みを刻もうと] 足を上げる間に、700 ファルサング⁶⁴⁾ 進むほどのものである。また、地球(kura-yi zamīn)から太陽の位置する地点までは、125万4339 ファルサングの距離である⁶⁵⁾。

ゆえに、このような驚異のうちに見るがよい。創造主——讃えあれ、崇高なれ——が、どのようにしてこの世界を創造したのか。これほど離れているにもかかわらず、[太陽の]力は、その熱によって、山や海や砂漠とともに地球[全体]を暖めるほどであり、近いところも遠いところも、世界中がその熱によって温かみを帯びる。たとえ世界中の薪を燃やしたとしても、1ファルサングの大地も暖まることはなく、1つの山や海でさえも暖められることはない。これほど偉大な太陽を、創造主こそが、他の星々とともに天をめぐるようにされたのである。

恒星は1022個あることが知られている。それら[のある恒星天]の大きさは、大地の4万9066倍である⁶⁶⁾。[我々は] 知っておかねばならない。これらの星の場所まで[太陽]天からどのくらいあるのか、広さはどれほどなのか、天の大きさはいかほどなのか。「万有の主アッラーに讃えあれ」[Q40:64]。[創造主のみが] これらをお創りになることができる。

さて、[この]世界で見られる太陽の不思議や珍しいことについて、いくつか述べよう。

<太陽の特性とこの世界への効用について>

知れ。創造主——その名が讃えられんことを——は、太陽や月を[この]世界の益や害の要因とされた。そのように定められたのは至高なるアッラーであり、[創造主は] それらをやみくもにお創りになったのではない。月や太陽には、この世界に対する特性や影響がある。そのことを否定する者は恥知らずである。

さて、[太陽にまつわる] 珍しい話をいくつかしよう。だが文責は伝え手にある。何となれば、創造主の完全なお力によれば、驚くべきことなどありはしないのだから。

次のことは明らかである。太陽が昇るときには、木や葉や草や花はすべて太陽のほうを向き、太陽が沈むまで、ともにまわる。(p.50) というのも、それらは成長する力を[太陽の]熱から得ているからである。[つまり] 創造主は水の中に湿り気を創造されたように、太陽の中には熱を創造された。

<逸話>

次のように言われている。マグリブ(西)の境域にはある動物がいる。[その動物は] 太陽が昇

64) 1ファルサング(あるいはファルサフ)は約6kmに相当。

65) ビールーニーは、地球から太陽までの最短距離を125万4639(ないし125万4638)ファルサングとする[Bīrūnī, Kitāb al-Taḥfīm, p.158(矢野・山本訳、第2部第4章)]。

66) ビールーニーは、恒星を1等星から6等星に分類し、各々を地球と比べた場合の直径や体積について述べているが、本文中の「4万9066倍」という値は、それらの値やその総和とは合致せず、このあまりにも大きな数値の典拠は不明である[Bīrūnī, Kitāb al-Taḥfīm, p.154(矢野・山本訳、第2部第4章)]。

るとすぐに子供を産み、子供を太陽にさらす。[子供は] 1日で大きくなる。太陽が沈むと [親は] 死ぬが、子供は妊娠する。次の日太陽が昇ると [子を産み、] 死んでいく。その寿命は1晩と2日しかない。

<不思議譚>

マクラーン (Makrān) とティーズ (Tīz)⁶⁷⁾ の境域にいる大きな動物は、海から上がり、太陽を見つめると気を失う。[太陽が] 傾くまでは、死んでしまったかのようにになる。水夫たちはそれで遊ぶ。太陽が沈むと、生き返る。日なたでは動かないが、[太陽に] 飽くことがない。

<逸話>

次のように言われている。サランディーブには蛇がたくさんいる荒野がある。キャラバンがそこを通るときは、家畜の足に鈴をつけ、蛇がそれを [嫌がって] 避けるようにする。そこには蛇が近寄らない木々がある。旅人はその木の下では安全である。太陽が昇ると、木は枝を地面に下ろし、人や駄馬が枝の上に立てるようにする。太陽が沈むと、枝は少しずつ上に上がり、馬や人を持ち上げる。そして次の日、太陽が昇ると [枝は] 下りてくる。

<不思議譚>

ルームのイスカダルに、人々が尋ねた。「あなたはこの世界でどんな不思議を見ましたか？」
[彼は] 答えた。「私は東西をめぐるが、中国 (Čīn wa Māčīn) で、ある不思議なものを見た。砂漠に木が生えており、そこから麝香の匂いが漂っていた。[その木は] 太陽の昇る明け方から (p. 51) 南中時までは地面から出ているが、南中時を過ぎると地下にもぐっていった。日が沈んだときには、すっかり地下に隠れてしまっていた。次の日、太陽が昇ると、その木は [地面から] 現れたのだ。」

<不思議譚>

ヒンドウスターンには「カルキース (karkīs)」と呼ばれる木がある。甘くて滋養のある、ブドウのような実をつける。西側になる実は日があたらず、苦くて死に至らしめる毒になるが、東側になる実は甘く、滋養がある。

<不思議譚>

次のように言われている。グール (Gūr)⁶⁸⁾ の境域に山があり、太陽が昇ると、山は黒くなる。[太陽が] 沈むと、10万もの美しい姿が山上に見える。明け方、太陽が昇ると、それらはみな消えてしまう。

<不思議譚>

テュルクとカシュミール (Kašmīr) の境域には2つの山がある。一方には、「白像 (ḥīng but)」と呼ばれる偶像が置かれ、もう一方の山には、「赤像 (surḥ but)」と呼ばれる偶像が置かれてい

67) マクラーンはイラン南東部ペルシア湾岸付近の地方名で、ティーズはその地方にある港町として知られる [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.329-333]。

68) イラン北東部のホラーサーン地方の町の名。

る⁶⁹⁾。[それらの像は] 太陽が沈むときには泣き、太陽が昇ると笑う。

このくらいで十分であろう。たとえこれらの話が奇妙であり、その真正さに異論があるとしても、創造主のお力によれば不思議なことではない。太陽には、このようにさまざまな驚異が創られているのである。

さてその形について、賢人たちの言葉から一文を述べよう。

<太陽の形>

知れ。太陽の形について、次のようなことが言われている。「[太陽は] 上下左右に何千もの角があり、地方ごとに数本ずつ、その角を伸ばしている」と。また、「太陽には6つの面があり、どれも一律である」あるいは「それぞれ異なっている」と言われている。ある者は、「我々が見ているのは太陽の裏側であり、太陽のおもては向こう側の別の世界にある」と言い、ある者は「太陽は火で満たされた天である」と言う。

こういったことはすべて、適当にあるいは憶測で言われているにすぎない。さもなくば、誰も[太陽に] 到達したことがないのに、誰がその姿を伝えられようか。

[イドリースの話]

(p.52) ところで『莊嚴なるクルアーン』を見ると、「永遠の父 (abū al-baqā)」にして「相続者たる主のしもべ ('abd al-Wārit)」であるアフヌーフ (エノク) (Aḥnūḥ)、[すなわち] イドリース・ブン・マフラーイル (Idrīs b. Mahlāyil)⁷⁰⁾ ——彼にアッラーの祝福があらんことを——に関する話が伝えられている。そこでは、「そしてわれはかれを高い地位に挙げた」[Q19: 57] と述べられている。すなわち [ペルシア語では] 「われはイドリースを高き場所にいたらしめた」である。彼は天上界 (malakūt-i āsmān) をめぐり、[天の] 諸層の状況を知った。[そのため] 諸天や星々に関するいくつかの伝承は、彼を通じて語り継がれている。

イドリースが天に昇った理由は次のとおりである。

ある日、彼は暑さの中を歩いていた。太陽の灼熱が彼に届いた。

イドリースは言った。「神よ、私は [本で] 読んだのですが、とある天使がこの太陽を任せられ、太陽を東から西に運んでいる、と。彼の仕事を楽にしてやってください。」

創造主は応じた。

[太陽を監督する] その天使は言った。「神よ、今日の太陽の管理は私にとって楽なものでした。何があったのですか？」

[創造主は] 言った。「おまえへのイドリースの祈りが届いたので、それを聞き入れてやったのだ。」

[天使は] 言った。「私にお命じになってください。私はイドリースのもとへ行きます。」

[創造主は天使に] 命じた。

[天使は] やってきて、イドリースに言った。「必要なことがあれば、私に求めるがよい。」

イドリースは言った。「私は、どうしても太陽の円盤が見たい。」

69) バーミヤーンの石窟にある仏像を指す [Hudūd al-'Ālam, Ed. M. Sūtūda, Intiṣārāt-i Dāniṣgāh-i Tihirān, Tehran, 1962, p. 101]。伝承によると東大仏は、僧衣の部分が赤く塗られ、顔の上部と手は鍍石 (真鍮) で鑄造されていたという。この像については、本書第6部でも触れられる。

70) イドリースは生きたまま天に昇り、ムハンマドのミウラージュの際、ムハンマドは第4天 (すなわち太陽天) でイドリースに会ったとされる [岩波イスラーム辞典: イドリース]。

[天使は]彼を持ち上げ、太陽のところまで連れて行った。死の天使が現れ、イドリースの命を奪ってしまった。天使は言った。「おお、死の天使よ。イドリースは私の客人であった。なぜ彼の命を奪ったのか？」

[死の天使は] 言った。「創造主は世界の始まりに私にお命じになったのだ。いついつの時間にイドリースの生命を太陽の円盤のところ奪え、と。今日、私はイドリースを地上で見かけたので、イドリースがどうやって第4天まで来るのかと考えあぐねた。[だが] 今しがた彼を見つけ出したので、即座に彼の命を奪ったのだ。」

天使は言った。「神よ、私はイドリースのために、どんな良いことをしてやったというのでしょうか？」

創造主はイドリースを生き返らせ、おっしゃった。「死のシャーベットを味わったものは、二度と死なない。この世とともに去り行くことはない。」

[イドリースは] まだかの地にいる。

また、「イドリースは天に昇る前に、天文学の書が与えられ、20万人の弟子をもっていた。彼らは諸天や星の学問をイドリースから学んだ」と言われている。星や天に関する話のいくつかは、彼らによって伝えられている。

(p.53) <逸話>

次のように言われている。

ある日、イドリースと彼の息子と1人の弟子が海岸に座っていた。1人の子供が通りかかったので、彼らは言った。「この子の最期がどのようなか、それぞれ占ってみよう。」

弟子は言った。「高いところから落ちて死ぬでしょう。」

息子は言った。「蛇が彼を噛み殺すでしょう。」

イドリースは言った。「高いところから落ち、蛇に噛まれ、水に溺れて、今日死ぬだろう。」

彼らが待っていると、その子供は岸辺に行き、1本の木に登った。木には鳥が巣をかけていた。[子供が] 巣に手をかけたとき、1匹の蛇が彼を噛んだ。[子供は] 真つ逆さまに下に落ち、水に沈んでいった。

さて、3人の言葉はどれも正しかった。ただ、イドリースの言葉がより完全であった。

この話の意図は、この学問はイドリースの時代にはあったが、彼とともに失われてしまった、ということである。

太陽の性質については、[これまで] 述べてきた程度で十分であろう。この本ではこれ以上扱わない。

一方、太陽の形については、王冠を戴いた若者のようだ、とも言われている。その王冠の上には輪が1つある。[太陽は] 馬車に乗り、それぞれの方向から数頭の馬がその馬車を曳いている。「それらは、軌道に浮かんでいる」[Q21: 33] と、至高なるお方のお言葉にあるように。

このことに関連して、次のようなことが言われている⁷¹⁾。太陽の性質は熱く、乾いている。[太

71) この部分は文意を把握し難く、直前の段落と合わせて挿入されている位置にも問題がある。サーデギー本ではこの一文と続く太陽の性質について述べた段落全体が欠落し、「……数頭の馬がその馬車を曳いている」に続けて「太

陽は] 贈り物や光や知性や高貴さをあらわすものであり、王や清潔さや高潔さに関連する。太陽に関連づけられるものは、信仰と黄金である。太陽は、「驚 ('iqbān)』⁷²⁾ や「王冠の所有者 (ṣāhib al-tāj)」と呼ばれている。知性ある者が「太陽という」この徴 (āya) について考えてみるならば、創造主の完全性や無限のお力を知るであろう。なぜなら「創造主こそが」被造物をお創りになり、その中にはこれらすべての意味が含まれているのだから。

続いて月の驚異と「この」世界へのその影響について、できる限り述べていこう。

(p.54) 第4章：この世界での月の効用とその性質について

至高なるお方のいわく、「また月には、天宮を振り分けた。(それを通して) ナツメヤシの老いた葉柄のように(細くなつて)戻ってくる」[Q36: 39]。創造主は、「われは月を創造した。そしてその宿り場それぞれを明らかにし、満ち欠けが[月の]中に現れるようにした。そうすれば、そこから暦を知ることができよう」とお伝えになっている。

知れ。月 (māh) は大いなる驚異である。アードムの子孫は見慣れてしまったものには、驚きを覚えない。そしていつも月を見ているために、[月を]驚異だとは思っていないのである。しかしこの世界に、月や太陽のように驚くべきものが「ほかに」あろうか。

月は球形で、[表面は]ぴかぴかしている。その輝きは太陽から借りたものである。月は第1天で輝き、すべての星の中でこの世界に最も近い。その大きさは、東から西まで[直径で]107倍である⁷³⁾。月天は東から西へとまわり、月はその上を、西から東へと反対にまわる。すべての星が同じ状態にあるが、それはたとえば、蟻が水車の上を反対にまわり、水車も逆向きに回転すると、蟻が水車を1周するまでに、水車は何度もまわり続けてしまうようなものである。月は30日で月天上をまわり、太陽は1年かけて太陽天をまわる。

【この世界への月の影響】

知れ。地上における月の影響は明白である。この月の影響というのは、創造主が月に定めたものである。

たとえば、月が昇ると果実は熟す。[すなわち]月が満ちていくと、月齢が増すにつれて、穀物の核もふくらみ、精液や血液が血管の中で増えるのである。月が欠けてくると、核もまた小さくなる。病気や[その]重篤さは、1ヶ月の四期や月の運行によって知ることができる。新月のときには癲癇は起こらず、月が満ちていく間も同様である。月が欠け始めると、脳髓が弱くなり、癲癇が戻ってくる。(p.55) 一方、慢性の病気については、太陽の運行や1年の四期によって知ることができる。

海の満潮や干潮は月によるものである。

陽の性質については「これまで」述べてきた程度で十分であろう。この本ではこれ以上扱わない」の一文が入り、「続いて月の驚異と……」の文が続く。

72) 本書巻末のミーノヴィー氏の訂正では、この語は“‘iqyān” (植物のように自生する、純粋な金) とされている。

73) ビールニーによると、月自体の直径と体積は地球よりも小さく、他方、月の天球(月天)の体積は200兆3566億5832万2333と3分の1ファルサング、また地球の体積は53億549万8589と5分の4ファルサングであり、ここで言われる「107倍」よりはるかに大きな数値になる[Birūnī, *Kitāb al-Taḥīm*, pp.155, 165 (矢野・山本訳、第2部第4章)]。別の写本では「170倍」という数字も挙がるが、本書においてこれらの数字がどのような典拠から導き出されたのかは不明である。

また、賢人たちが月に関連づけているのは、鉱物の中では銀やガラス、あるいは白い石すべてである。動物の中で月に関連づけられているのは、牛やラクダ、そして海や寒冷地の動物である。月の性質は冷たく、乾いており、粘液質である。月には熱があるが、それは偶有のものであり、本来のものではない。

樹木や苗木、とりわけブドウを植えるのは、月が満ちていく時期でなければならない。そうすれば大きく成長し、すぐに強くなり、なかなか傷まない。月が満ちていく時期に性交をすると、害は少なく、立派で良い子供が生まれる。月が欠けていく時期の性交は体が消耗し、子供は病弱で、腎臓が弱くなる。

こういった事柄を、創造主は月の中にお創りになった。ワインを樽に詰めると、月の初めは濁っていても、月が満ちるにつれ、澄みわたる。木々は、月が満ちる間は地面から水を吸い上げ、月が欠ける間は、幹の中の水は減っていく。月が欠けていく時期に切り取った草木は、みなすぐに傷んでしまうが、月が満ちていく時期に刈り取った果実や草木は、なかなか傷まない。この世界での月の効用は明らかである。

夜、そなたは月が光っているのを見るだろう。だがその光や輝きは、太陽からのものである。というも〔太陽は〕月に正対し、月には太陽が見えているからである。太陽は、夜は大地の下にあり、我々には見えない。しかしながら、月には太陽が見えている。太陽が月の全体を見ると、西方に〔沈む〕太陽に月が正対する満月の晩のように、月全体が光を受ける。太陽から逸れていけばいくほど、月は欠ける。

月天から太陽までは非常に距離がある。大地から月天までは3万6295ファルサングである⁷⁴⁾。賢人たちが適当に述べる月の姿とは、2枚の翼のある若者であり、頭の上には、太陽よりは小さいが王冠を戴いている。

[夢に現れる月について]

知れ。夢に現れる月や太陽は、「帝王 (pādšah)」をあらわす。

誠実なるアーイシャ (‘Āyīša-yi šiddīqā)⁷⁵⁾ (p.56) ——彼女にアッラーの満足あれ——は、夢で3つの月が彼女のまわりに落ちるのを見た。預言者——彼に平安あれ——が世を去ると、アブー・バクルは言った。「おお、アーイシャよ。これがかの月の1つだ」、すなわち〔ペルシア語では〕「おまえが夢で見た月の1つがこれだ。」

〔預言者は〕アーイシャの部屋に埋葬された。ついで信徒の長アブー・バクルが死去し、預言者の傍らに埋葬された。

そこでアーイシャは言った。「この3番目の月は誰なのかしら？」

やがて、ウマル・ブン・アル＝ハッターブが短剣で刺された。彼はアーイシャのもとへ伝言を送った。「よろしければ、預言者とアブー・バクルの傍らに私を葬ってくれまいか。決めるのはあなただが。」

アーイシャは言った。「部屋は私の持ちものです。私は夫や父のそばにいたいと思っておりますが、あなたが望まれるのであれば、あなたに譲りましょう。」

74) ビールーニーの伝える地球から月までの距離は3万6295（ないし3万6395）ファルサング [Bīrūnī, *Kiūāb al-Taḥfīm*, p.158 (矢野・山本訳、第2部第4章)]。

75) 「誠実な人 (šiddīq)」と呼ばれたアブー・バクルの娘であり、ムハンマドの晩年の妻。

ウマルは死ぬ間際になって、遺言をのこした。「私の亡骸をアーイシャの家の門前に運べ。そして私を部屋の中に埋葬する許可を求めよ。もし許可が得られなければ、私をバキーク(Baqī')墓地⁷⁶⁾に埋葬せよ。」

彼らは言った。「彼女は同意しています。」

ウマルは言った。「私は心配性なのだ。私が死んでしまったら、[彼女は]親切にせず、認めてくれないかもしれないではないか。」

彼らはウマルの亡骸をアーイシャの家の門前に運び、許可を求めた。

アーイシャは言った。「いったいどういうことですか？私が、生前にはその人に従ったのに、死後は裏切る、とでも？[すなわちペルシア語では]彼が活着している間は受け入れたのですから、彼の死後、どうして拒絶しましょうか。」

こうして彼は部屋の中に埋葬された⁷⁷⁾。彼女は言った。「これが3番目の月なのだわ。」

この話は、夢の中で見る月や太陽は「王」である、ということを示している。

[逸話]

ある女が、月が昴(turayyā)の方へ行く夢を見た。彼女はムハンマド・ブン・スィーリーン(Muḥammad b. Sīrīn)⁷⁸⁾に話した。イブン・スィーリーンは食事をしていた手を止めた。顔は青ざめた。そして言った。「おおアッラーよ、私は死ぬのだ。」

[彼は]この女に言った。「7日のうちに、私は世を去るだろう。」

7日後、ムハンマド・ブン・スィーリーンは世を去った。ムハンマド・ブン・スィーリーンは卓越した学識者の1人だった。

(p.57) [月にまつわる話]

知れ。月についてはさまざまな驚くべき話がある。私はよく知られているものを紹介しよう。

次のように伝えられている。使徒の教友の1人がアブー・ジャフル(Ābū Jahl)⁷⁹⁾に尋ねた。「預言者について、彼が本当に預言者である証拠となるような驚くべきことを何か見ましたか？」

彼は言った。「ああ。彼が子供のとき、祖父のアブド・アル=ムッタリブ(‘Abd al-Muṭṭalib)が彼の揺りかごをカアバの屋根の上に置かせた。あまりにも暑かったからだ。明け方、私は月を見たが、それは天から降りてきて彼の揺りかごの周りをまわっていた。預言者は幼く、泣いていたのだが、それで泣きやんだ。すると[月は]再び天に戻っていった。」

[人々は]このことを預言者に問うた。

[預言者は]言った。「そうだ。月は私に言ったのだ。『私に用はないか？』と。私は言った。『もしあなたに割れてくれるよう私が頼んだら、どうするのか？』と。[月は]言った。『割れよう』と。』不信心者たちがこれを聞き、言った。「その主張が本当だと見せてみる。」

76) ムハンマドの時代から用いられているマディーナ郊外の墓地。「バキーク・アル=ガルカド(Baqī' al-Garqad)」とも呼ばれる [岩波イスラーム辞典：バキーク・アル=ガルカド]。

77) ウマルがアーイシャに、預言者の傍らに葬られる許可を求めたことについては、ハディース集にも見える [プハーリー『ハディース』(牧野訳)、上巻、373頁]。

78) ムスリム最初の夢占い師にして、きわめて信頼に足るとされる伝承家(728年没) [EP: Ibn Sīrīn]。

79) 本名はアムル(Ābū al-Ḥakam ‘Amr b. Ḥiṣām b. al-Muḡīra)。ムハンマドのマッカ時代の敵対者であり、「アブー・ジャフル(無知な者)」は蔑称である。バドルの戦いでマッカ側の指揮をとり、戦死した(624年没) [岩波イスラーム辞典：アブー・ジャフル]

預言者——彼に平安あれ——が2本の指で合図をすると、月は2つに割れた⁸⁰⁾。ウマル・ブン・アル＝ハッターブは言った。「私はヒラー山（al-Hirā）を2つのかけらの間に見た。」つまり [ペルシア語では] 「私はヒラーの山頂を、2つになった月の間に見た。」

ヒンドや中国の地でも、2つに割れた月が見られ、それが記録されている。

<不思議譚>

次のように言われている。スィヤーム（Siyām）の山⁸¹⁾では、大麦を刈り取る時期になると月が昇り、いつの間とどまったのち、沈んでいき、次の年まで [現れない]。その理由は誰も知らない。

<逸話>

信徒の長アブー・アリー・チャガーニー（Abū ‘Alī Čagānī⁸²⁾）は言っている。「ハーカーンの王（malik-i ḥāqān⁸³⁾）は、この月の状況を調べるために、大きな一団とともに私を遣わした。私は大変な苦勞をしてそこにたどり着いたが、その原因が何なのか、まったくわからなかった。そこで私は、賢人たちにそのことについて尋ねてみた。彼らが言うには、おそらく、山の下に水か水銀があり、月の光がその水に当たって山に反射し、さらにその反射した像が山から空気中に出ていくのだろう、とのことだった。」

(p.58) <逸話>

イブン・ムカンナ（Ibn Muqanna⁸⁴⁾）は [自らが] 預言者であると主張した。彼は水銀を井戸に流し入れた。太陽が天頂に達すると、水銀の光が反射して、空中に月が現れた。彼はこのような詐術で、「私は新しい月を出現させたのだ」と主張した。しばらくすると太陽が [傾いて] 逸れたので、それは見えなくなった。

ある者は、月の表面にある黒い部分は大地の山々が反射したものであり、光っている部分は海や川が反射したものだと言う。確かなことは、あの黒い部分はジブリール——彼に平安あれ——の羽根の跡だということである。

80) 『クルアーン』第54章（月章）の冒頭に、「時は近づき、月は微塵に裂けた」とある。これは、一説には、徴を求められたムハンマドが、月が割れるのを人々に見せた証だとされる [岩波イスラーム辞典：月]。

81) Siyām (Sinām) ないし Sayām と呼ばれるサマルカンドやキシユ近郊の山。後述のムカンナが拠点とした [Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, p. 469; Barthold, W., *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London, 1968, p. 134]。本書の山の項には現れない。

82) 10世紀の半ばにケルマーン地方を支配したイルヤース朝の創始者（967年没）[*EF*: Čaghāniyān]。ここで彼に「信徒の長」の称号が付されているのは不適切であり、本書巻末の訂正一覧にあるように、文章の最初の部分が落ちてしまっているのであろう。またイルヤース朝の創始者がハーカーンの王に（おそらくは2つの月の見られたヒンドか中国へ）派遣されるはずはなく、テキストに欠落や錯簡がある可能性が高い。

83) どの王を指すかは不明。時代から考えて、イスラーム側史料で「ハーカーン朝」と呼ばれたカラハン朝（9世紀中葉～11世紀中葉）の王か。

84) ここでは「イブン・ムカンナ（ムカンナの息子）」として現れるが、アッバース朝カリフ、マフディー（在位775-785年）の時代にホラーサーンで反乱を起こしたムカンナ本人のことであろう。彼の本名は確定されておらず、絹のヴェール（一説によると金の仮面）で顔を覆っていたため、「ムカンナ（覆面をした者）」という通称で呼ばれた。反乱は鎮圧され、783年に死亡した。死因は毒殺とも自殺とも伝えられる [*EF*: al-Muqanna’]。

第5章：星々とそれらの創造のすばらしさについて

至高なるアッラーのいわく、「本当にわれは、星々で下層 [の天] を飾り、(アッラーの命令に) 逆らう悪魔にたいする守りとした」[Q37: 6-7]。この章句は、[ペルシア語では]「われは星々を英知でもって創造した。1つは [この] 世界の天の飾りとするため、もう1つはシャイターンたちが天を狙わないようにするためである。もし星々の瞬きがなければ、彼らは諸天を狙ったであろう」という意味である。また別のところで[創造主は]、「星を頼りにかれら(人びと)は導かれる」[Q16: 16]、つまり [ペルシア語では]「われは星々を創造した。それらでもって、海や荒野で道を見つかることができるように」とおっしゃった。[ちなみに] ここで言われている星とは、「子山羊(北極星)(al-jady)」と「2頭の子牛(ファルカダーン)(al-farqadān)⁸⁵⁾」のことである。

天にあるこれらの星について、考えてみなければなるまい。あるものは南で、またあるものは北で、[天を] めぐるっていったい何千年になるのか。北にあるものは我々が目にしており、たとえば「棺の娘たち(北斗七星)(banāt-i na'ās)」のように、我々の頭上をまわり、決して大地の下に沈まない。一方、南天にある星は我々から遠く、南の地域で見られるもので、彼らの頭上で回転し、北天では見えない。

(p.59) [星に関する驚異について]

知れ。星々の働きは単純ではなく、それに関する学識は否定できるようなものではない。[たとえば] 太陽の影響は誰もが知っており、[太陽が] 北へ行けば空気は暑くなり、離れると空気は冷たくなる。一部の無知な者たちは、「太陽や星々が影響を及ぼすものだと言う者は不信仰者となろう」と言うが、誤りである。というのも、創造主がこれらの中に [影響を及ぼす力を] お創りになっているのであり、星が自ら創り出すのではないからである。「星が自ら創り出す」などと言うことは不信仰である。預言者——彼に平安あれ——は言った。「星々を信仰する者は、不信仰者である」⁸⁶⁾、すなわち [ペルシア語では]「星 [それ自体] が創り手であるとみなすならば、不信仰者となる」と。一方、決定者を神と考え、星はその媒体だと考えるならば、それは信仰そのものである。

天文学者たちは次のように言っている。土星の性質は不吉であり、冷たく、乾いている。金星の性質は湿っており、快活さをもたらす。火星の性質は殺戮や戦争をひき起こし、「小凶(nahs-i asgar)」と呼ばれる。木星の性質は学識を増し、平穏と安定をもたらし、「大吉(sa'd-i akbar)」である。水星はさまざまな学識と聡明さをもたらす、と。

[だが] 私は言おう。これらのことは創造主のみがご存じであり、人がこのように判断することは認められていない。このようなことを言う人というのは、あるいは、このような判断を下す人というのは、自らの気質を本当には知らないのであろう。

寒さに捕らわれている裸の貧者のことを考えてみるならば、彼の心の中には、土星も驚くほどの寒さによる悲しみがある [ことがわかるだろう]。彼に衣服が与えられ、何ディーナールか恵まれるならば、彼の心の中には、金星も驚くほどの喜びが生じるだろう。また、誰かが親しい者の死を

85) こぐま座のβ星とγ星を指す。「ファルカド」は現在もγ星の名称として用いられる。

86) プハーリーの伝えるハディースには、「アッラーの言われるには、今朝、僕達の中には神を信じる者と信じない者が居る。神の恵みにより賜物として雨が降った、と言う者は神を信じているが、星によって雨が降った、と言う者は星を信じ、神を信じていないのだ」というものがある [プハーリー『ハディース』(牧野訳)、中巻、415-416頁ほか]。

伝えられるとしたら、その心には、土星や火星も泣くほどの悲痛が生じるだろう。そう、すべての星は熱い性質をしている。それらの本質は熱く、さらに別の熱が運行の速さゆえに、偶有として生じるのである。

星々の法則や状態を知り尽くしているのは誰であるか。(p.60)「スハー (suhā)⁸⁷⁾ と呼ばれる最も小さい星は、東から西まで〔直径は地球よりも〕何倍も大きい、その場所が遠いために、小さく見えるにすぎない。もしファルカダーンの1つが下りてきて大地の真上に落ち着いたなら、その下にある大地は盾の下のディルハム銀貨のようになり、大地のあらゆる方向からその〔星の〕端々がはみ出すであろう。私は、太陽が獅子宮に入ると空気は熱くなり、双魚宮に入ると空気は湿って冷たくなる、ということ以上に〔星々の〕性質については知らない。もっとも〔創造主は〕それぞれの星に特性をお与えになった。たとえばスハイルはヤマン (Yaman)⁸⁸⁾ に現れる星であり、「ヤマンのシウラー (シリウス) (šī'rā-yi yamānī)⁸⁹⁾ は多神教徒たちがそれを崇め、「主の中の主 (rabb al-arbāb)」と呼んでいる〔星である〕。ただし『クルアーン』では、「また狼星 (シリウス) の主もこの御方」[Q53: 49] と伝えられているのだが。カルビー (Kalbī)⁹⁰⁾ は、「洒落者 (カベラ) ('ayyūq)」が現れるときは必ず、ミスのナイルを除き、世界中の川が干上がり、昴が現れるときは必ず海が荒れる、と言っている。[だが] これらすべては二次的な原因 (sabab) でしかなく、その原因を付与される (musabbib) のは創造主なのである。

この後は〔5つの〕惑星について述べよう。

<土星について。至高なるアッラーがどのようにしてそれを創造されたのか>

土星 (zuḥal) は第7天から輝いている星である。土星天は諸天の中で最も広い。〔土星は〕30年で天を1周するが、〔黄道十二宮の〕各宮を2年半で移動し、1度ごとに1ヶ月とどまる。このようにして毎年20度⁹¹⁾ まっすぐに移動し、年に2回、1回は右から、もう1回は左から、太陽と〔90度の〕矩 (tarbī) の位置になる。また1回は合 (qirān) になる。その後、太陽は土星から逸れて離れていき、20日後の日の出前の早朝に〔再び土星は〕現れる。大地の中心から土星天までは、1971万4240ファルサングである⁹²⁾。惑星の中でこれよりも遠い星はない。

[逸話]

コヘスターン (Quhistān) にある聡明な算術家があった。算術家たちが彼を試そうと、土星までの距離について尋ねた。〔算術家は〕言った。「あなた方にはこのような計算を解くことはできない。(p.61) とはいえ、土星の位置する場所から岩をひとつ投げたなら、地上に届くまでに1000年はかかるだろう。」

算術家たちはみな、彼の聡明さを認めた。

87) 北斗七星の柄の第2星の傍にある小さな星を指す〔岩波イスラーム辞典：北斗七星〕。

88) イエメンのこと。

89) おおいぬ座のシリウスについては、後注121を参照のこと。

90) Hišām b. Muḥammad b. al-Sā'ib al-Kalbī のこと。737年頃クーファで生まれ、819年または821年頃同地で没した。「カルビー」はクーファの有力な家系の名前であり、彼は一般的にイブン・アル＝カルビーの名前で呼ばれた。アラブ部族の系譜学を始め、『系譜集 (Jamharat al-Nasab)』、『偶像の書 (al-Aṣnām)』、『良き血筋の書 (Ansāb al-Ḥayr)』等150点を超える著作を著した。その死は時のカリフ、マームーンを大いに悲しませたという〔EF: al-Kalbī〕。

91) 12度の誤り。

92) ビールニーは、地球から土星天までの距離を1791万4241ファルサングであるとする〔Bīrūnī, Kitāb al-Taḥfīm, p.158 (矢野・山本訳、第2部第4章)〕。

この話の意図は、我々は被造物の状態についてさえ、まったく理解していないのに、いわんや創造者については「知るよしもなからう」、ということにある。

土星の性質は、天文学者たちの言葉によると、冷たく、乾いている。暗い黒胆汁質である。また、長旅や敵意、策略、圧制、孤独を示す。死や下劣さ、動物では竜、夜の鳥、黒い動物、鉾物では鉛や黒い石、信仰ではユダヤ教が土星と関連づけられている⁹³⁾。

土星の姿は、賢人たちの言葉によると、いくつかの黒い水差しを自分の前において山を掘っている1人の老人である。だがこのようなことは、知性からかけ離れており、私は賢人たちが述べているがゆえに、言及したまでである。文責はその語り手にある。

<木星とその美しさについて>

木星(muštārī)は第6天から輝いている星である。12年で天を1周する。1ヶ月ごとに2.5度進み、太陽とは2回、1回は右から、もう1回は左から、矩の状態になる。その後、太陽は木星から逸れ、20日後の早朝に「木星は再び」現れる。「木星は」「大吉星(sa'd-i akbar)」と呼ばれる。賢人⁹⁴⁾が「木星が幸運である証拠は何か」と尋ねられたとき、彼は「その美しさである」と答えた。トゥルキスターンの不信仰者たちはそれを崇拜の対象とし、それに対して祈っている。地球から木星天までは991万2040ファルサングである。木星は東から西まで「直径は」、大地の約95と4分の1倍である⁹⁵⁾。

木星の性質は熱くて穏やかで、風質(hawā'i)である。生命や天命、学識や信頼のしるしである。木星に関連づけられるものは、動物の中では人間であり、鉾物では雄黄と硫黄、信仰ではキリスト教である。

木星の姿は、賢人たちの言葉によると、黄金の王座に座り、頭に王冠を戴いた壮年の男である。彼の下には、馬、牛、野牛、ラクダが1頭ずついる。アッラーは最もよく知りたまう。

(p.62) 知れ。私は賢人たちに驚いている。彼らは、星の姿かたちについてこのような言葉を弄し、光り輝くもの(nayyirāt)を生命あるもの(hayawānāt)に擬し、木星を牛やラクダと一緒にしている。このような知識を彼らはどこから得たのだろうか。第6天にどうやって行き着いたのだろうか。木星をこのように描写し、木星の周りでは東から西まで蠅がいる「などと言う」とは。私は、彼らが言っていることを述べたまでである。知識はアッラーの御許にあり。

<火星について>

火星(mirṭḥ)は第5天から輝いている星である。〔1年で〕天全体をまわり、各宮には45日とどまる。太陽が火星を追い越すと、火星は2ヶ月で「太陽の」光の下から出て、太陽の昇る前の明け方、東〔の空〕に現れる。太陽との合(muqārana-yi šams)から次の合までは、788日である。地球から火星天までは132万3301ファルサングである。火星は東から西まで「直径は、地球の」1.5

93) ビールニーは、7つの星の熱冷乾湿、関連づけられる動植物や場所、地域、信仰などについての長大な表を挙げている。また、星の姿についても述べているが、本書の記述とはあまり合致しない[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥīm*, pp. 367-392]。

94) 「賢人(al-hakīm)」となっているが、誰のことを指すのかはわからない。この一文はすべてがアラビア語であるため、何らかの本からそのまま引用したのだろう。後述の「磨羯宮」では「この賢人(in hakīm)」として、おそらくは「星座の書」の著者であるアル＝スーフィーを指していると思われるため、ここもまたその可能性はある。

95) ビールニーによると、地球から木星までの距離は991万9443ファルサング、木星の直径は地球の92と6分の1(ないし95.14)倍である[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥīm*, pp. 155, 158 (矢野・山本訳、第2部第4章)]。

倍である⁹⁶⁾。

火星の性質は熱く、乾いている。火質（nārī）である。若さや勇敢さ、怒り、暴力、盗み、威圧、喧嘩のしるしである。動物では狼と豚、鉱物では鉄や赤い石、信仰では太陽崇拝が火星と関連づけられる。

天文学者たちの言葉によると、火星の姿は、武器を手に円形の玉座に座る若者である。彼の下にはハイエナ、狼、犬が1匹ずつ、そして雄鶏が1羽いる。この星は「小凶星（naḥs-i ašgar）」と呼ばれている。火星天に狼やハイエナがいるというのもまた、馬鹿げたことである。あるいは火星が玉座の上で何をするのか。星があるその場所で、[火星の]燃えさかる熱や力に対して、玉座や武器がどのように持ちこたえられるというのか。ともあれ、賢人たちが言っていることを私は述べた。

<金星について>

金星（zuhra）は第3天から輝いている星である。金星は（p.63）太陽と同じように[黄道十二]宮の中をまわる。太陽の前を、あるときはすばやく、またあるときはゆっくりと進み、そして戻ってくる。太陽の光の下には3ヶ月とどまり、[その間は]金星を見ることはできない。その後[金星は]夕方西[の空]に現れ、8ヶ月の間、見え続ける。太陽との合から丸1周するまでは380日であり、そして戻ってくる⁹⁷⁾。地球から金星天までは18万3657ファルサングである⁹⁸⁾。

金星には優美な性質があり、女、装飾品、衣服、芳香、歌、音楽、愛を示す。金星と関連づけられる動物は美しい娘たちや魚であり、鉱物では真珠や銀や銅が、また信仰ではアラブ人の信仰が関連づけられる。

賢人たちの言葉によると、金星の姿は、頭の上に黄金の水差しをのせ、玉座に座った美しい女である。彼女の上にはブドウの木があり、玉座の下では4人の女がそれぞれ1束のメボウキを持ち、匂いをかいでいる。知識はアッラーの御許にあり。

<水星について>

水星（uṭarīd）は金星と同じような状況の星であり、第2天から輝き、太陽から離れることがない。[太陽と]一直線の合から次の合まで129日かかる⁹⁹⁾。地球から水星天までは6万9400ファルサングである¹⁰⁰⁾。

水星の性質は乾いており、信仰に関する諸事や預言者性を示し、諸学問や知性、繊細な事柄、および動物では犬や鷹、鉱物では珊瑚、水銀、緑のもの、信仰ではキリスト教が水星に関連づけられる。

水星の姿は、天文学者たちの言葉によれば、玉座の上で書物を手にした痩せた男であり、彼の下には老人、従僕、女、少年が1人ずついる。天文学の徒のこのような迷妄な話もまた、馬鹿げたことである。なぜなら、水星はある種の星であり、水星のある世界はすべてが水星であり、端から端まで水星で覆われている。誰ひとりとして、その縦横[の大きさ]や限り[となる端]を見ること

96) ビールーニーによると、地球から火星までの距離は136万3361ファルサング、火星の直径は地球の1と6分の1（ないし1.27）倍である[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, pp.155, 158（矢野・山本訳、第2部第4章）]。

97) 「(丸1周した後に)戻ってくる(rāji' ast)」という表現の意味は不明瞭であるが、直前の文章にある「戻ってくる」に引きずられたのかもしれない。

98) ビールーニーによると、地球から金星までの距離は18万3657（あるいは18万3656）ファルサングである[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, p.158（矢野・山本訳、第2部第4章）]。

99) 実際の会合周期は115.9日である。

100) ビールーニーによると、地球から水星までの距離は6万9407（あるいは6万9146）ファルサングである[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, p.158（矢野・山本訳、第2部第4章）]。

はできない。他の星々の場合もまた(p.64)同様である。[それにもかかわらず]星のひとつを老人に、別のものを若者や女にたとえるなどという迷信が語られるのを、どうして認められようか。アッラーよ、我々を虚偽と誤謬から護りたまえ。

この後は、宮について述べよう。

[第6章:] 諸宮について、至高なるアッラーはどのようにしてそれらを創造されたのか

至高なるアッラーのいわく、「諸星座のある天において(誓う)」[Q85:1]、[すなわち]創造主は、[黄道十二]宮(burūj)のある天においてお誓いになった。ゆえにそれは創造主の誓約の場所であり、それら[諸宮]について知ることは重要であろう。

[知れ。]宮は恒星天(falak al-burūj)上で12に分けられる。[恒星天は]「諸宮の帯(mintaqat al-burūj)」とも呼ばれる。たとえば、マクワウリに12の房(hāna)があるのと同じように、それぞれの家(hāna)に1つずつ宮がある¹⁰¹⁾。この恒星天は7つの天の上にあり、先の7つの惑星はこの帯の下でまわっている。ある星がある宮に重なり合うときには、「何々の星がどこその宮にある」と言う。これは、よく考えてみれば理解できるであろう。

賢人たちはこれら12の宮に、あるものは「子羊(hamal)」、あるものは「雄牛(tawr)」というように、[それぞれ]姿かたちを当てはめている。[だがこれは、]天に子羊や牛やカニがいる、ということではなく、これらの宮を、「それぞれの宮は何個の星からなり、その配置が牛やサソリや弓のようである」と解しているにすぎない。弓の端からもう一方の端まで、あるいはサソリの頭からその尾まで、距離を推し量ってみたところで、何千ファルサング離れているのか、神以外には誰にもわからない。

<白羊宮>

第1の宮は「白羊宮(hamal)」である。これは火の宮であり、男性的¹⁰²⁾で、昼と東を司り、能動的(sabuk-raw)で、上昇時間が短い(andaq maṭāli'¹⁰³⁾)。羊の姿をしており、2つの頭があり、うしろを振り返っている。「中国の山には盛り上がったところがあり、太陽が白羊宮の初点(p.65)にくると大水が流れ出す」と言われている。白羊宮に関係する都市は、アゼルバイジャン(Āzarbayjān)、ムーカーン(Mūqān)¹⁰⁴⁾、フィラスティーン、コヘスターン、イスファハーンである¹⁰⁵⁾。太陽が白羊宮の最初[の角度]に至ると、世界中どこでも夜と昼は同じ「長さ」にな

101) 訳はテキストに従い「マクワウリ(harbuza)」としたが、イメージとしてはミカンの実が内側の房で分かれているように、宮によって恒星天を12等分した、と考える方がわかりやすい。

102) テキストは次の単語と合わせて、NW NHARYと記されているが、金牛宮などで「女性、雌」を表す“māda”が出てくるので、NW (naw)ではなく、「nar(雄)」だと判断し、このように訳す。サーデギー本ではNHARYの前の語は省略され、記されていない。

103) “maṭāli'”は、「上昇(ascensions)」と訳され、中世の天文学及び天文学的計時の重要な概念である。「上昇」は、目に見える天体の回転を計測したものであり、通常、東の地平線から計測する[EF: al-Maṭāli']。

104) 大抵は「ムーカーン(Mūqān)」「モカーン(Muqān)」と呼ばれる。カスピ海西岸部にあり、サバラーン山脈からカスピ海岸まで広がる広大な湿地帯である。アゼルバイジャンの一部とされることもあるが、普通は区別される[Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, pp.175-176]。本書の諸都市の項目には現れない。以下、本書で言及される地名については、特別な場合を除き、説明を加えない。

105) 十二宮の熱冷乾湿、関連づけられる方角や元素、地域などについてはビールーニーを参照のこと[Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, pp.317, 322, 335-336]。また、それぞれの宮の姿(絵図)、星の配置・名称については、アル＝スーフィーの『星座の書』が参考になるが、本書の記述とは必ずしも一致しない[al-Ṣūfī, *Ṣinwar al-Kawākib*, pp.138-255]。

る。[この宮は]「[春] 分点の宮 (burj al-i'tidāl)」とも呼ばれる。この宮には「血塗られた手 (kaff al-ḥaḍīb)」¹⁰⁶⁾ と呼ばれる星があり、北側にあつて吉兆である。

<金牛宮>

「金牛宮 (ṭawr)」は土の宮で、女性的で、夜と南を司り、まっすぐに昇り (mustaqīm al-ṭulūʿ)、受動的 (gīrān-raw) で、[体が] 両断された牛の姿をしている。金牛宮はミスルの上昇宮 (ṭālīʿ)¹⁰⁷⁾ であり、ヘラート (Harīw)、ハマダーン、マーヒーン (Māhīn)¹⁰⁸⁾、クルド人たち (kurdān) [の地]¹⁰⁹⁾ の上昇宮でもある。不動宮で、春の真ん中にあたり、動かない。この宮には「雄牛の目 (ʿayn al-ṭawr)」¹¹⁰⁾ と呼ばれる星がある。それは南側にあつて、死をもたらす凶兆の星である。一方「魔物の頭 (raʿs al-gūl)」¹¹¹⁾ と呼ばれる星もあり、北側にあつて死をもたらす。「死をもたらす」とはすなわち、人は誰しもある度数 (daraja) のときに生まれるが、その度数がこの星に達すると、その度数の持ち主は死ぬ、という意味である。このような星のことを、「死をもたらすもの (qattāl)」[「生命を」切り離すもの (qāṭīʿ)] と言う¹¹²⁾。こういったことは自然主義者たちの言葉であり、[その本来の意味は、]ヘビには毒を、またミツバチには蜂蜜をお創りになったように、創造主はその[宮の]中にこのような意味を創造された、ということである。

<双子宮>

「双子宮 (jawzā)」は風の宮であり、男性的で、昼と夏と西を司り、能動的で、傾いて昇る (muʿawwaj al-ṭulūʿ)。双子の姿をしており、たがいに相手の肩に手を置いている。双子宮は、ダイラマーン (Daylamān)、ジョルジャーン (Jurjān)、カーブル (Kābul)、バルハーン (Barḥān)¹¹³⁾ の上昇宮である。双子宮には、南側に6つの星がある。1つは「圧制者(オリオン)の頭 (raʿs al-jabbār)」¹¹⁴⁾ と呼ばれ、[生命を]切り離す凶兆の星雲 (saḥāb) である。別の星は「右側の双子の肩(ベテルギウス) (mankib al-jawzā al-ayman)」と呼ばれ、同じく死をもたらす。別のものは「左側[の双子]の肩 (mankib al-aysar)」¹¹⁵⁾ と呼ばれ、他にも「ベルトの中間 (al-wasaṭ min al-mintaqat-hu)」¹¹⁶⁾、「左の足(リゲル) (al-qadam al-yusrā)」と呼ばれるものがある。「洒落者(カ

106) カシオペア座のβ星(カフ)のこと。白羊宮の説明でカシオペア座が出てくるのは、カシオペア座の経度が白羊宮に属しているためである。著者の認識する十二宮は、春分点が起点(白羊宮の初点)になっており(トロピカル方式)、この方法をとると、歳差運動によって、十二宮の位置は黄道十二星座に対して右回りに少しずつずれていく。このため、本書で白羊宮にあるとされている星はうお座寄りに、金牛宮にあるとされている星はやぎ座寄りである。このことは以下の宮についても同様である。同様に、宮は天球を便宜上12に等分したものであり、すべての恒星は黄道十二宮のいずれかに属するため、各宮にある星は、黄道十二星座を構成する星に限らない。

107) 誕生時に東の空に見える宮のこと。ホロスコープでは重視される。

108) ホラーサーンの小村あるいは北西イランのターロム地方にある小村か。本書の諸都市の項目中には現れない。

109) 特定の民族・集団の上昇宮となっている、獅子宮などでの用法に準じて訳した。あるいは、イランとイラクの国境近くにある町(クルダーンもしくはキャルダーン)とも考えられるが、本書の諸都市の項目には見られない。

110) おうし座のε星(アイン)のこと。

111) ペルセウス座のβ星(アルゴル)のこと。

112) いわゆる「奪命星」のことである。

113) ファールスの一地方とされるが、『世界の諸境域 (Hudūd al-ʿĀlam)』や、ヤークートの『諸都市事典 (Muʿjam al-Buldān)』には現れない地名である。本書の他の部分にも現れない。ピルルーニーの書で「バルジャーン (Barjān)」と記されているものと同一の可能性もある [Bīrūnī, *Kitāb al-Taḥfīm*, p.235]。

114) 『星座の書』や『アルマゲスト』でも、「オリオンの頭」にある星は星雲とされている [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、349頁; al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, p.270]。なお『アルマゲスト』では、この星雲はオリオン座のλ星(メイサ/ヘカー)にあてられる。

115) 『星座の書』に見える「左の肩」に相当するオリオン座の3番目の星は、『アルマゲスト』ではオリオン座のγ星(ベラトリクス)となる [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、349頁; al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, p.270]。

116) 「ベルトの中間」に相当する星は、『星座の書』ではオリオン座の37番目の星であり、『アルマゲスト』ではε星(ア

ペラ)」は吉兆の星である。「御者の肩(メンカリナン)(*mankib dī al-‘inān*)」と呼ばれるものも吉兆である¹¹⁷⁾。

(p.66) <巨蟹宮>

「巨蟹宮(*saraṭān*)」は水の宮で、女性的で、夜と北を司る。[夏]至点を持ち、夏を支配し、まっすぐに昇り、受動的である。上昇時間は長く(*bisyār maṭāli‘*)、青黒いカニの姿をしている。巨蟹宮は、マルヴ(Marw)、バフライン(*Baḥrayn*)、ハジャル(*Hajar*)¹¹⁸⁾、イフリーキヤ(*Ifrīqiya*)、マルヴ・ルード(*Marw-rūd*)¹¹⁹⁾とホラーサーン(*Ḥurāsān*)の上昇宮である。太陽は巨蟹宮に達すると、[その後は大地から]遠ざかっていく¹²⁰⁾。巨蟹宮には4つの星がある。「ヤマンのシウラー(シリウス)」と「シウラー(プロキオン)(*šī‘rā*)」が南側にあり¹²¹⁾、「双子の頭(カストル)(*ra’s al-taw’am*)」は北側に、また「うしろの双子の頭(ボルックス)(*ra’s al-taw’am al-mu’ahḥar*)」も北側にある。「飼いやけ(*al-mi‘laf*)」¹²²⁾もまた北側にあり、死をもたらす。

<獅子宮>

「獅子宮(*asad*)」は火[の宮]で、男性的で、昼を支配し、真夏の不動宮である。東を司り、能動的で、上昇時間は長く、まっすぐに昇る。ライオンの姿をしており、その前方には火がある。獅子宮はテュルク人[の地]、イランの地(*Irānšahr*)、ムクラーン(*Mukrān*)、バスラ(*Bašra*)、ベルベル人(*barbar*) [の地]の上昇宮である。獅子宮には「ライオンの心臓(レグルス)」と呼ばれる星がある。死に至らしめる星で、北側にある。

<処女宮>

「処女宮(*sunbula*)」は土[の宮]で、女性的で、夏、夜、南を司る。まっすぐに昇り、受動的で、上昇時間が長い。右手に小麦の穂を持ち、頭に黄金の冠を戴いて立つ女の姿をしている。処女宮はアンダルス(*Andalus*)、ファールス、シャーム、ユーフラテス(*Furāt*)、ケルマーン(*Kirmān*)の上昇宮である。この宮には星が1つある。「変化させるもの(デネボラ)(*šarfā*)」と呼ばれ、北にあり、吉兆の星である。太陽が処女宮に至ると、海の波は荒れ、激しくなる。

ルニラム)となる[プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、349頁; *al-Šūfī, Šuwar al-Kawākib*, p.272]。

117) 一部の星の同定は困難であるが、ここで述べられている星は、主にオリオン座やぎょしゃ座の星である。現在の星名では、「ミンタカ」(オリオン座のベルトにあたる三連星の左端の星)、「アルニタク」(三連星の右端の星)などに、アラビア語の「帯(*mintaqa*)」の名残りをとどめ、また「メンカリナン」(ぎょしゃ座のβ星)に「御者の肩」の影響が見られる。なお、本文では「南側に6つの星がある」とされているが、挙げられている星は7つであり、また、カペラとメンカリナンのあるぎょしゃ座は北側にある。

118) バフラインにある町。

119) ムルガープ川上流にあるマルヴ・ルードは、「小マルヴ」とも呼ばれ、マルヴとは区別される[*Le Strange, The Lands of the Eastern Caliphate*, p.398]。

120) “*‘aṭṭāb ba-gardad*”の意味は不明瞭であるものの、夏至点を通過した後の太陽は地球から遠ざかっていく、という意味だと解す。

121) おおいぬ座のシリウスとこいぬ座のプロキオンはともに「シウラー」(両者を合わせて「シウラーヤーン」と呼ばれた。区別のため、それぞれ「南のシウラー」「北のシウラー」とも呼ばれている[岩波イスラーム辞典:シリウス]。これらの星を含む、アル=スーフイーの記すおおいぬ座とこいぬ座については、鈴木孝典「アブドゥッラハマーン・スーフイーの『星座の書』における「オリオン座」および「おおいぬ座」・「こいぬ座」の記述」『東海大学文明研究所紀要』13(1993)を参照のこと。

122) 『アルマゲスト』では「秣桶」と呼ばれ、『星座の書』では「飼いやけの欠片(*al-natra al-mi‘laf*)」と呼ばれる、かに座の1番目の星であろう[プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、336頁; *al-Šūfī, Šuwar al-Kawākib*, pp.127-128]。

<天秤宮>

「天秤宮 (mīzān)」は風の宮で、男性的で、昼、秋、西を司る。能動的であり、まっすぐに昇り、上昇時間が長い。手に天秤を持った壮年の男の姿をしている。天秤宮はケルマーン、スイースターン (Sīstān) の一部、トハリスターン (Tuḥāristān)、バルフ (Balḥ)、カシュミール、ヒンド、ルームの上昇宮である。天秤宮には4つの星がある。「槍を持つスイマーク (アルクトゥルス) (simāk al-rāmīḥ)」と「かんむりからの輝き (al-munīr min al-iklīl) ¹²³⁾」はともに北側にある。「武器を持たないスイマーク (スピカ) (simāk al-a‘zal)」は南側にある。天秤宮は、[秋] 分点のある宮である。また、太陽が天秤宮に達すると、(p. 67) 世界中どこでも夜と昼は同じ [長さ] になる。この宮は秋を司る。

<天蠍宮>

「天蠍宮 (‘aqrab)」は不動宮で、水の宮である。女性的で、夜と北を司り、まっすぐに昇り、受動的で、上昇時間が長い。

次のように言われている。あるアラブ人が風邪をひいた。1人の天文学者が言った。「太陽が天蠍宮にある。この風邪はその影響である。」

彼は言った。「サソリにアッラーの呪いあれ。サソリは、大地においても天においても有害なものじゃ。」

天蠍宮はアラブ人 [の地]、バスラ (Baṣra)、ヤマン、ヒジャーズ (Ḥijāz)、アーモル (Āmul)、クームス (Qūmis)、ソグド (Suḡd) の上昇宮である。天蠍宮には2つの星があり、1つは「サソリの心臓 (アンタレス)」と呼ばれ、南側にあって死をもたらす。もう1つを「サソリの毒針に続くもの (al-tālī la-humma al-‘aqrab) ¹²⁴⁾」と呼ぶ。

<人馬宮>

「人馬宮 (qaws)」は火の宮で、男性的であり、昼と東を司り、能動的で、まっすぐに昇り、上昇時間が長い。弦を張った弓を持ち、うしろを振り返りながら矢を射ようとする騎手の姿をしている。彼の前には尾を高々と上げた蛇がいる。太陽が人馬宮に達するとファールスの海は荒れ、人馬宮から出て行くと、夜には海は風ぎ、船を走らせる、と言われている。人馬宮はイスファハーン、マクラーン、レイ (Ray) の上昇宮である。人馬宮には、「射手の目 (‘ayn al-rāmī) ¹²⁵⁾」と呼ばれる星があり、星雲である。[ちなみに]「星雲」とは雲の色をしたもののことである。[その星は] 北側にあり、凶兆で、[生命を] 切り離し、死をもたらす。

知れ。天文学者が、「星雲がある」とか、「夜や南 [を司る]」とか、あるいは「火の宮、風の宮である」と言うことには同意しよう。だが、「これこれの姿をして、死をもたらす」などということには同

123) 『星座の書』では、かんむり座の1番目の星がこの名 (場合によっては「鉢からの輝き (munīr min al-fakka) ¹²⁴⁾」) と呼ばれ [al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, p.58]、『アルマゲスト』では、同星座の α 星 (ゲンマ/アルフェッカ) に相当する [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、325頁]。

124) さそり座の外側 (尾の近く) にある星がこの名で呼ばれている [al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, p.213]。

125) 『星座の書』や『アルマゲスト』によると、いて座の目に星雲がある [プトレマイオス『アルマゲスト』(藪内訳)、343頁; al-Ṣūfī, *Ṣuwar al-Kawākib*, p.221]。

意できない。なぜなら、天には少年も老人も存在しないからである。彼らはいい加減な推量で述べているにすぎず、真実を見極めて述べているのではない。

<磨羯宮>

知れ。「磨羯宮 (jady)」は土の宮で、冬を支配し、[冬] 至点を持ち、女性的で、夜と南を司り、受動的で、傾いて昇り、上昇時間は長くも短くもない (miyāna-maṭāli¹²⁶)。また、アフワズ (Ahwāz)、マダーイン (Madāyin)、スインド (Sind)、ヒンド、オマーン (‘Umān)、ルームの上昇宮である。磨羯宮には北側に星が2つあり、[どちらも] 吉星である。それらを「飛ぶ鷲 (アルタイル)」と「落ちていく鷲 (ヴェガ)」と呼んでいる。[磨羯宮は] 大きな耳とそれぞれに開いた四肢を持った山羊の形をしている。

(p.68) 知れ。「磨羯宮は冬で、冬至点を持ち、夜と南方を司り、受動的で傾いて昇る」と天文学者が言っていることには同意しよう。しかし、「女性的で、山羊の姿をしており、四肢が開いている」ということには同意しない。というのも、山羊も子山羊も天には存在しないからである。彼らはここで、星の配置をこのように理解しているにすぎない。

とある書物には、「山羊の背後には古ぼけた服を着た老人がいる」と書かれていた。何たることぞ！[かの] 賢人の知性たるや、衣服が古いか新しいかをどうやって知り得たのか、という程度のことさえ理解できないのだ。あるいは「手には杖を持っている」と言っているが、どうやって彼の手にある杖を見たというのか。その杖で誰を打つというのか。あるいはその星に、杖にもたれかかるような衰えがいつ生じたのか。

『図像の書』によると、天蠟宮は、頭をサソリの脇において眠っている少年であるという。彼が[ひげのない] 少年かあるいはひげのある男か、この賢人はどうやって見たのだろうか。しかも天蠟宮は全長1億ファルサングもあり、この少年が眠っているか起きているかをどうやって知ったのだろうか。これほど広大な中で、彼はサソりを枕にするしか場所を見つけられなかったとでもいうのか¹²⁶⁾。

<宝瓶宮>

「宝瓶宮 (dalw)」は風の宮であり、男性的で、昼と西を司り、能動的で、冬を支配し、至点を持ち¹²⁷⁾、傾いて昇る。水があふれる井戸の形をしており、若者が立って桶に水を汲んでいる。彼の後方には、裸の老人がいる。宝瓶宮は、クーファ (Kūfa)、ミスル、ジョルジャー、ヒジャーズ後背地 (zahr al-Hijāz) の上昇宮である。この宮には、南側にある「魚の口 (フォーマルハウト) (fama al-hūt)」と北側の「雌鳥の尾 (デネブ) (ḍanab al-dajāja)」という[名の] 2つの星がある。後者を「臀部 (ridf)」とも呼んでいる。

知れ。宝瓶宮が風[の宮]であり、昼、西、冬を司り、至点を持つことには同意する。だが、水があふれる井戸があり、若者が水を汲んでいる、ということには同意しない。なぜなら、天に井戸や水や網は存在しないからであり、そのような水で一体何をするのか。また、彼の後方には裸の老人がいる、と言っているが、彼が老人であるかどうかどうやって知ったのか。賢人の視力はどうやってそ

126) この段落は、おそらく先の「天蠟宮」の項に入るものであろう。

127) 宝瓶宮には至点はなく、著者の誤り。正しくは先に見た「磨羯宮」。

の男の白髪を見分けたのだろうか。もし衣服を着ていたとしたら、それが白か黒か、あるいは絹か綿かということがわかったとでも言うのだろうか。

(p.69) <双魚宮>

「双魚宮 (hūt)」は女性的で、水の宮であり、夜と北を司り、受動的で傾いて昇る。2匹の魚の姿をしており、それぞれの頭はたがいの尾のほうに向いている。その前方には1人の女が座っている。彼女の前には、逆さに吊り下げられた子供がいる。双魚宮は、タバリストーン (Tabaristān)、サマルカンド、ブハーラー (Buḥārā)、イスカンダリーヤの上昇宮であり、冬の宮である。この宮には2つの星があり、1つは「馬の肩 (mankib al-faras)」¹²⁸⁾と呼ばれている。北側にあり、凶兆で死をもたらす。

以上が、過去の賢人たちによって述べられたり、いにしへの書物に記されたりした [黄道十二] 宮の様相である。その一部は観測によって確認され、1022個の恒星が48の星座に割り当てられている。長年にわたって観測が続けられており、夜には星の運行を [実測で] 確認し、昼には深い穴¹²⁹⁾の奥底で、同じように穴蔵から星を見つめている。ところで、ギリシアの地には、諸天と宮の図が映し出された海があったと言われている。今、その地方は [地勢が] 変化して水が覆ってしまい、誰もその場所を見つけ出せない。この程度を述べれば、ここでは十分であろう。

【賢人たちの迷妄について】

知れ。賢人たちが宮を「男性である」とか「女性である」というのは、喩えとして言っているのであり、真実ではない。アラブ人が太陽を「女性」と言い、月を「男性」と言うようなものである。このようなことに対して、天文学者たちは、たとえば、「処女宮は女性であり、土の宮で、南を司る」と言うが、「女性」や「土質の」というのは明らかにされたことではない。また、「土星は老人の姿をしており、手につるはしを持ち、山を掘っている」というのは、天文学者たちの妄言にすぎず、「火星が剣を振りかざし、切り落とした頭をもう一方の手から吊るしている」とか、「金星は女で、傍らには竖琴がある」というようなことはすべて喩えであり、憂鬱質からくる迷妄でしかない。[このようなことは]『クルアーン』にはなく、受け入れなければならない伝承の中にもない。東から西まで [直径が] 大地の10倍もある土星が、なぜ、つるはしで山を穿たねばならないのか。(p. 70) 山は第7天で何をしているのか。金星が竖琴を奏でたり、土星が嘆いたりしているのを誰が見たのか。金星の竖琴を誰が作ったのか。土星の挽歌は誰の不幸のためなのか。私が述べてきたことは、本書が [これらのことに] 触れずに終わることのないように、彼ら [賢人たち] の言葉を引用したにすぎない。そして、民衆をあざ笑う哲学者たちの知性の貧弱さを明らかにしたまでである。[記すことによって] そなたが、創造主がお創りになったものを偉大なものと知り、[それらを] 敬意ある目で見つめ、「われらが主よ。あなたはこれをいたずらにお創りになったのではない。あなたに講えあれ。われらを地獄の責苦よりお護りください」と言うように。

続いて、火の創造の不思議とその効用について述べよう。

128) ベガス座の α 星 (マルカブ) や β 星 (シェアト/メンキブ) を指すか。『星座の書』では、ベガス座の前脚付け根にある3番目の星がこの名で呼ばれている [al-Šūfi, *Šuwar al-Kawākib*, p.123]。

129) 周りの光を遮断し、日中、星を観察するためにつくられた穴のこと。